まちづくりネットワーキングえひめ

一 たうん

VOL 61



松山市釣島にて

特 「1999 時代が変わる 何かが芽生える」 集

- ―高齢化時代の潤いのあるまちづくり―
 - ふるさとの山へ美化で恩返し
 - 「安心して楽しく老いる」島づくり
 - 地域伝統芸能を守り続けて
 - ●町並みガイドに誇りと生き甲斐
 - JAと地域の架け橋「みつば会」

■論談─まちづくり─聖カタリナ女子大学教授

下田 正

■キラリ光るまち 山形県 寒河江市

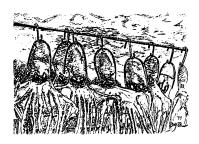
工藤 順一



★歩キ目デス&足ラテス

岡崎 直司

アングル			
[5	5むぐりさ」に学ぶ詩 人/森原	₹ 直子·	1
(特)集) 『19	999 時代が変わる 何かが芽生える』		
一高	S齢化時代の潤いのあるまちづくリー		
	ふるさとの山へ美化で恩返し新居浜市/杉	彰.	2
	「安心して楽しく老いる」島づくり関 前 村/美萠	美智子 .	4
	地域伝統芸能を守り続けて	3 徳福·	6
	町並みガイドに誇りと生き甲斐宇 和 町/上甲		
	JAと地域の架け橋『みつば会』三 間 町/兵頭	● 節子	10
論談一まちつ			
	高齢社会とまちづくり聖カタリナ女子大学社会福祉学部教授/下田	正 .	12
キラリ光るま			
	観光農業、夢、感動 山形県寒河江市/工藤	順一	14
リレーでちょ			
	笑顔の似合う 人と町松 山 市/岡田	3 純子·	16
	『桑力宣言』双 海 町/魚見	直理	17
風おこしのち		, 74.1	.,
2000 - 000		誠。	18
研究員レポー			
	ワークショップに求められるもの 一全国ワークショップ交流会に参加して一沖田	· 敏広·	20
	人間工学から人間幸学へ 引き算型まちづくり考 一第17回逆手塾に参加して一 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		
MY TOWN 5	うぉっちんぐ 歩キ目デス & 足ラテス	. ,,,,,	
•	実践ウォッチング "郡中見てある記"岡崎	· 庙司·	24
Information			
	媛のくにフラッシュ〈新宮村・小松町・伊方町・八幡浜市〉		26
	読者の声・こえ・声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		28
	まちセンからのお知らせ		29
	取光生ん れく高 り元地 く社いそ験 す寿は	A	、 胜
	りりきでそまり齢明戻気域こい会にれや高。社四我	<i>令</i> 高 号	特集
	けい事れで゛ 時いこな阻しつ動け次識者 をに国	齢の潤化す	2 -
	げい事れで。、時いこな潤しつ動け次識者 をに国 で、時いこな潤ししも動け、で、 で、時にとり滑たしをある。 の、時には、 の、神で、 で、 で、 で、 で、 で、 で、 で、 で、 で、 で、 で、 で、 で	月化~	
	まるりもで の測針しるとルいったに能た とがー	時代	' አ .
	し "ををは 目い会よずなバまてり伝をち う高十	あの	例が代
編	た	あるま	が代芽が
集 子	一十一世紀初頭に 一十一世紀初頭に 一十一世紀初頭に たちは、豊かな経に伝えたり、詩本を有しており、 に伝えたり、詩本を有しており、 がずみずしさをれば、地域は、 がを持ちながら、 りを持ちながら、 りまう。 りまう。 りまっ。 りまっ。 りまっ。 りまっ。 りまっ。 りまっ。 りまっ。 りまっ	ちづ	何かが芽生える
•	たい で はい かい	5	えるる
龍	、、に育らづち 取は、 多な互、経 ま長に	i)	_



龍)

到島に降りた時、珍 らしい光景に出会いま した。 一級なと風に乗ってい る蛸の姿干しです。蛸 にも顔立ちがあるよう で、美男、美女は問え が、この干し蛸の味が、 絶品でして、火で炙り、 絶品でして、火で炙り、 が、この干し蛸の味が、 が、この干し蛸の味が、 で、 護油、 みりん、砂 だールのおつまみに間え にした。 ŋ 潮風が快い季節とな 釣人もぞろぞろと。 柳原 あや子

詩 森原

体

何と答え

たのの

か

7

た

 \mathcal{O}



こし る。 潤 31 れ た水が輝 か 六月に 渇き始めていたところが を覚える。 黒 れ 土 田 は き、 が水を含み、 植えの準 ると、 私の 心 のどこかす 原体験を 田 備が始 1= 水 張 から

子 言 ける大人にならんとなぁ」 ように 守歌でも 幼 って 私を膝に抱いて祖父は、 「この足でちゃんと た。 歌っ その言葉に て聞かせるか

そこに見るのであ

ろう。 その うに きた であ かっ ということも無縁だったのだ い」ということも 何と答えたのか。 べてをあきらめているかの しんどい 迎えた祖父は「年を取るの のきざみ ない た。 言 後、 の る。二十代の 一った。 は が 煙 答えら 0 八十才をすぎ晩年 碓 草のの お か ずっと心に秘 その時 で ٤, 匂いとともに。 12 あ 「心が痛い」 私には なかったの 何も答えな る。 はおぼえ f まるで そ 私 一老 め 0 は す は を 時 7

となのだろうか。 ふり 味や重大さに とすると、 か かっつ て初め 気 人 、は自分の身に 付 て、 くというこ 事の意

会った。

入れ てし 近年 0 になった。 気 祖 父は まうことが 持ちを たいと思う反 父の老いと向き合うよう 他界して久し あるが 思うと言葉を失っ 多い。 面 ままを受け 日本語 父本人 が

間では な 的 かもしれな を介在させる必要などない と考える。 勇 لح 0 T しみや不安を少しでも和らげ、 未 O気づけ 揺れをずっと感じてきた。 そんな時、 いのではない な父の苦悩 ね」ですまされ、 熟さを だ はこんなにも ろうかと、 「また来るわ」「待って 悔 る言葉はないもの もっとも、親子の い。しかし、 13 る。 こんな一文に出 E 向き合って 自 か、という心 せ 分の語 不便だっ 逆に言 め て、 根 彙

葉

これ ます らが は う字を書きます。 ね、 13 書きます で書きますと、 ということで か 「ちむぐりさ」これ 肝。 わ はどうい なでりさ。「 6) 心 が そうと それから苦し ね、 肝 痛 う意味 いう すね 肝という字を 1 肝苦りさ」。 それ レ 言葉が 心が苦 かと申 バ から いと を漢字 神 ーです 縄 W 13 あ 13

> いうんです。 0 ŋ ŧ 人 を見ると せ ん。 か わいそうな状 肝 苦りさ」 لح 熊

苦

「にっぽ

6

縦

断

人

間

ば

な

時に、 解す の言葉に、 温かさを感じるのであ を見たように思う。 自分の痛みだといいきる沖 た理屈では 感じる言葉。 とでは 心 るとか、 が痛い、 沼田曜 風 なく自分の心 土、 なく、 人の優しさの 人が育 相手の より 共有す 苦しい、 人 そして同 む 0 るとい が 立場を 言 痛み 痛 人のこ 原 葉 ſ,) σ 縄 が つ 理 点

木 0

67

られ、 葉に 6) かと ま た、 よって人が、 心 合わ 豊 か 13 せ鏡のように なる 地域が育て 0 では な

ĮΣ 言葉をそっ ちむぐりさ」この優 と胸 抱 () て 1 た



果樹 半くら ていました。 住民の ての松 は 垣 全 生山 家畜 園とし 山 大切な 0 葉 松 までは は 草刈 掻き て耕 13 覆 昭 作、 和三十 場とし わ 中 生 腹ま 山菜 れ 活 そ 0 燃料と て、 や茸 場とな 年 12 で より 畑 代 地 採

全く入れ 発 生 パ 後 笹 な ガ 生 スの 山 1 活 状 蔦 は が 荒 態になって 普及や 豊か 12 雑 放 松喰虫 が 題とな なり、 茂り

垣生山遊歩道の 開発

体 るさと 0 自 婦 計 L 画さ 音 然 が 人 て、 昭 協力 会、 頭 を 和六十三年、 垣 で 12 老 1= あ 人 0 自治 Ш ŋ 青少年 会その他 子供達に 遊 事 業 歩道の 7 会を中 健全 垣 ンを残して 0 生公民 各種団 一環と 育 心に、 開 発が 成 Š 館

部 knf 13

位

置 1:3 Ĺ 兀

六二名、 総 面

几

九 Ŧī. 坦は

は 新居

浜市 積

. の

東

六 北 垣

生と垣生山

巾 やろう!」を合言葉に汗を流 ました。 最 m 終的 程 (T) 遊歩道の 完成を見 1 は四四 千三百 m

(1)

垣生山よもだ会の発足

山

があります。

る形で、

高さ

百 端

m 13

程 海

(T)

垣

します。

その

東

に突

小規模校区に

した。 長な 話し合 運営する 全員の忌憚のない提言を尊重 地域づくり」を主目的に、 づくりに協 或る講 前代表世話 自治会長でも 管理を模 遊歩道の整備及び維持管理と 遊歩道 を得て、 演に 索し 参加 グ が完成し、 規約 全員 力した同好 組 ル 公民館及び遊 人 織づく 7 1 0 あ なし プ 強要なし 0 畄 った今は亡き ſ, · 賛同 が誕生 部 る その維 ・会費 ŋ 時 0 卓氏が を得て 0 士と 步道 ヒン 会 持

として、 均 **,まし** 年齢七十才でした。 初会合で その 名を た。 平成二年一月十二日 発足することとな 会員三十 『垣生山よもだ会』 四 名、 平

組織と運

(2)、会や作業の 代表世話 作業や会の 務局を置く。 として、 人の世話役を作り、 人と 公民館長を含む数 企画及び連絡役 庶 っする。 務係として 名を

(4)作業は半日とする。 施する。 (3) 毎月

0

定

例会を必ず

実



遊歩道草刈り作業



会誌「遊歩道

垣 生山よもだ会の活動

(3) 手作: (2) 栗 (1) 樹 年間の実施事項 (4)レの設置 会 遊 步道案 木の 員 桜 ŋ 0 名票札取付 提言を元に、 山茶花の植 ン 八内版 チ の設 道 it 標、 樹 過去九 ٢ イ

(7) 会誌 (6) (5) (11)(9)(8)厚厚に関う よも 感想 出 展望台の 到母山 だ山 心箱の 遊 証の 証の 建 設 歩 成 道 設 置 地 建設 の造 建 設 0 発行 成

> (16)(15)14保育園児と 作業 小学 リエンテーリング等 竹 学 七 館での門松づく 細工、 草採 ,習ボ 校、 取、 ランティアとし 凧 公民館、 の栗 づ L くり教室、 め 縄づくり l, 垣 生 7

総 括

多

<

0

賞を

1

ただき

会員

0

道賞」、

لح

新居

大きな励みとなりました。

幟

O

掲揚

に育 歩道 グ 交 0 グ 以 ち、 流 上 場とし は 光学習 定着 一の様 健 康 学 7 管 校 な活動 活用 理 0 才 厚岸草 遠 0 IJ がで垣 され 足、 ウ エ 才 ン 他校 るよう b 生 1 テ 山 丰 1 順 ン ij لح 調 遊

六 0 遊 歩 道 整 備

になりました。

(13)

年間

Ŧī.

5

一学習 オ さと 3 関 県公連より 浜 0 S Е 市 ユ またこ るさとづくり賞」、 づく 本を ニテ . の 寸 体 「まちづくり創造 ŋ 創 れらの 0) 1 振興奨励賞」、 る 評 推 優良団 協会よ 価 進 を 活 協 頂 動 議 体賞」 ŋ き は

会

ょ

ŋ コ

県

あ

L

た

Š

る

だいています。 と 県 間 L 7 寄付を活用 ない また 1 を るが 市 で多くの 「よく会費も徴 た そ だ 0 き さ 他 ます 活 せ 0) لح 7 補 動 助金 0) をし ιJ が 質 た 収

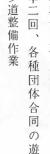
7 が は 気 づくりに 者 木 グル 均 不足し S に張り 0) 0 現 終戦 経験 年令 実や るさとの 在 1 会員 切って 役立 後、 Ł 7 を プ 雑 活 で 木 V) + は Ш た時、 てば す が 食 か DΓ いま 糧 L が 才余と高 + 垣生山 と、 私 P 7 九 す。 燃料 地域 高齢 達 Ш 名 0

生活を支えてくれました。

諸

機

とを願っております。 忘 美 な L 達 か ĺ また、 たい に らも れず つ 我 残 l J て 々会員 と思っております。 iz 故 市 す 愛され 事 思 郷 将来子 外 で 0 13 同 る 出 山 出 は、 供達が大きく Ш 山に恩返し してくれるこ て行っても、 「垣生山」を に 綺麗 L して子供 で 誰 を



(12)



▶厚岸草の育成

▶保育園児との栗拾い



▶山荘建設作業



"一九九九 時代が変わる 何かが芽生える: ―高齢化時代の潤いのあるまちづくり―

「安心して楽しく老いる」 島づくり グループだんだん 会長 美藤 美智子 得れし多風都行隣か 人いちもこ利

「グループだんだん」の

ŋ ボ 対 月 式 を ラ でし 発足 L てニ 行って が テ Ł ル 十三 枚 た 当 います 0) 7 0 プ 名になりました。 時 チ 時 は だ 間 ツ 0 6 登録 が 平成 ブ だんし 0) 会員五 人七年七 有効に や 時 間 が正 ŋ 取

> 利用 ことを大変喜んで もあります。 か、 た あ して、 まだ良 It 12 ま た、 ど、 グルー 、分か どうしたらよ 何 ープに か l, りに お役 る人 入っ たたち に <

得ません。 分に 習 が失わ 会 わ 近 b 時代 共 周 12 所 残 b 昔 辺 7 12 لح 細 から親戚関係が多く つ 温 13 来まし 共に や 7 7 比 か 行 関前村は島で お か な助け < ŋ た。 12 S 、ます。 傾向は 少し ば、 12 今で あ 合い ず 人情 免れ つこ しか が



٤, ようにしよう。 が 合 とうの てきた、 私たちの 1 を 日常茶飯事の普通 0 方 ごく当 までも 言 .だんだん」 (あり そして、 は たり 無くさ 昔 前 から続 0 さら のこ 助 it

> 別を問いません。 ま あ 13 15 す。 ということでやっ 多種多様な形 () 0) 輸 従って、 を広げ で、 年 7 齢 l, て きた S 性 12

チップは心の

世話、 b 手 物 荷 要 紙の など。 ない 行われています。 物 0) に + 応じ 送 0] 代筆とい 洗 運 人 ビ ŋ 濯物の取り入れ、 食事 迎 の送迎、 て多彩で 搬 ス 0 え、 作 今治 内 0 ŋ 子 保 たもの 守 の買 育 b,

を置いています。「してもらう」ことに重点だけの一方通行ではなく、そして「してあげる」

るという時間預託の制度とは 将 時 で を ることが目 渡 間 す 来 してもらったお礼 局を点 自 か しますが 5, 分 数 が にして貯めていき 的ではありません。 不 ボランティアした 2 たときに使え チ ッ プを貯 13 チ .7 80 ブ

た 致 ても 考え方が違っ 15 側 プ 0 L 大 します み は か 5 が 13 るも ボ 0 年ごとにす チ ラン ツ 時 で、 ています。 間 プ 0 が テ で 何 に応じて感謝 1 何枚 は 5 アを受け なく、 か べ て精算 貯 0 利 ま 益 つ チ

せん。 の意を表明する手段に過ぎま

ために、 12

時

おり、 せ

かな

たり、

取

にばなり

ま

ん。

そのこと

▲1時間チップ2枚のお礼

たり、 だいて交流をすることなどが わ 必要になって参ります。 じ ず、 8

福 外 師 4 導 L

祉関係 部から を ダ

者に来 公的私 7 0 1

る

タイ

ラー 招

> 関 ただい 私たち ささや

係

者をは

講

研修会をし

い的を問 ていた

組

みを指 親会を

7

7 0

「だんだん」のこれから

う。 まっ只中にあると言えましょ るを得ない状況にあります。 重 分たちの廻りを見ても、 l J うよりも そんな超高齢の島でも、 い在宅介護支援に関わらざ 私 地 たちの地 域 のあちらこちら、 超 域 は、 高齢化社会の 高齢化と 今は、 み 自

11 できれば、 が 流 いる」ことができるのでは 頼り かと思っています。 日常 合 「安心して楽しく老 生 助け合うことが 活 の中でお互

しております。

人に気軽

にものをた

気

軽にし

てあげ

同

士という基本的な考え方

ため

1

は、

お

互

いい

親密に

な る

まだまだ、未熟なグル

1

プ

ŋ

信

頼関係が深く

ならなけ

で会員の拡張

ボランティア

とを、 だく、

他

の誰

に助 んな

けていた

んなが家族のように気軽に交

人間

は

4 か

弱

からい

0)

めに

ボラン

テ

T

を

する、

自

分もまた、

一人で出 1 6 分 人

来ないこ

に、

それを望

(0 間

る人

0

た 間 係

を無く

自

出 0

来

る時

人一人の

強弱

関

と思っています。 くことに努力したい 焦らずに持続して行 報を交わしながら、 ますが、 十分な点が沢山あ 意識の浸透など、 んと常に話合い、 会員の皆さ





お互いさまと助けあう社会に



特 集 九九九 時代が変わ る 何か が芽生える。 高齢化時代の潤いのあるまちづくり

地域伝統芸能を守り続けて 肱川町山鳥坂鎮縄神楽保 德 福 田

神楽との出会い

楽し 生まれてきた私にとって まれ 設 現 奉 など、 在 納 いう急峻 大正 みだっ 0) 3 た私にとっ よう 12 六年、 何 る に、 b た な な 神 0) 地 肱 娯楽 か が、 楽 7 形 Ш 町 つ 0 た 春 幼 Ш 下 でし 時 村に لح 13 嵯 遊 代に 戱 た。 頃 峨 秋 0 生

> した。 知らず な姿を見 けていっ な気分で ぐような 合わせ 大イベント 太鼓と締め て舞 0 たものです。 て、 間 気 分に う、 に引か 毎 太鼓 を見に 体 なり か 0 神 12 中 :楽の 0 か さざず 0 1) 行くよう 7 ľλ 知 IÍII, 幻 ズ 5 が 想 4 出 きま ず 的 騒 13 掛

始め てから うもの Ŧī. 成され 在この神 楽を見て非 保年間 (宮崎 ここで鎮 ってお 殼豊穣、 たと言わ 県)に行き、 連 より か 7 楽は 中 b) を お 和気氏 を 天下泰平を祈るた 常に感動 肱 説 縄め ŋ + 12 川 言い 明 つくってこれ 神 :楽と 八 7 0) L 神 0) たまたま神 祖先 伝え 113 ますと 霊を 13 島坂に ます。 は 曲目で どう が 13 慰め、 による 帰 Н を 伝 構 現 向 13 享 つ

班野)

祝 来ました。 めに奏ぜられ この 1 人の家 や厄 神社 神 でも を中 楽 落 0) Ļ る、 特 心とし 幅 徴 広 米 とし く舞 というよう 寿 祝 7 て、 わ 4 12 新

が 厳 など他に 人問答には 0 ています。 多彩に構 舞と、 類を見 素朴 成され 力感あ な な方 13 5 特色とな 言 古伝 12 口が入る 0 鬼 13

> がします。 きたのは未 ましたが

のようなことを、

だにないような気

在の若者に言っても聞き入

な

る

舞

納

得

0)

11

く舞が

で

神楽の伝承

ます。

12 現

られ

な

1

ことが多

13

と思

ちでい した。 時 た ときでした。 父 した。) に帰れないことも 鼓をさせら が、 代でしたから、 0) 私 宿泊 勧めもあって、 自 身が神楽に入ったの (この当時 す 67 ぐに L からと しなが 12 るは 基本 最 5 1 初 は 80 的 うことで は L 荷 車などない 週間も家 物を背負 12 な舞 ば カ 十六歳 なり バン持 L ば 4 は ま 太 7 0

音は耳で聞いて覚えよ。」とい 先輩の舞を目 た人は 芸の世 わ 界に一 かると思 で盗み、 度足を踏 ますが 太鼓の み入

など 莊 築 7 うとお L クーク 家に帰ったときに、 た。 It えてもらえませんでし てコ 六十 n 0 ツ 舞 基 奺 を コ 本的な舞以 身に ツと練 年 間 神 つけてき 楽を 習 ひまを 外 舞 は ま

何に確 うか 後継 現 を中心とした会社員が増えて、 由 0 言 不安なことだらけです。 0 以 自営業者が ど今後 たして何人いるだろうかなど、 気実の は、 質 外 0 1 の 日 利きに 0 ます 者となってくれる者 0 ない 変化 保 の課 に、 中 生 す で 0) 活 が る < のでは 題 伝 と車 休 少なく 0 か。 変化に として 後 神 暇 1, 統 楽の が + 継 芸 社 なり ラリ また、 な 者 能 取 会 伴 を 舞手を 難 0 13 12 0 にく 1 でし 育 守 L 中 が果 娯 ± 1) 成 ると 7 で、 楽 Н ょ 8 ほ 加 11



山鳥坂鎮縄神楽 ロンドン公演

海 外公演を契機に

でも、 す。 0 展 ことが じることができた喜び された、 域 目に、 行った神楽の、 で伝統芸能を守ってい 望 参加させていただき、 伝統芸能活用センター それ 王が開 か 海外で日本を代表して演 できたと思えるか は、 伝統芸能海外交流 しっかりと焼き付 It 昨 たような気が 私のような小さな 年、 中 ・堅の 財 寸 を る人間 ・が実施 後 法 将 5 ける 継者 しま 来の 人 公演 緒 地

> ながら最高 十をすぎた私 た訳 まっ 私 騨 アー 都 セに二千の つまり 高 達の神 八 です。 八丈島 た見本市 Ш 世 Н 0) 伝 界 ズ 楽 本 統 各 0 コ 齢でした。 芸能 0) からく 参 ブースが で 玉 ì で、 が メンバ 八丈太鼓」、 加 1 0 1 うと幕張 团 の紹介を行 旅 日本のP で 当 体も、 ŋ 行 開 業者が 然 1 人形」 できた状 催 で、 0) こと 東 メッ さ R لح 形 京 集 12 0

演 け 食 海 b t 六 舞 Ľ る 物 制 外旅 なけ 事の + が 0 最 約され ぬ 台 はおろ 全体 ス 終了 夜も 高 が +} 年 に 心 12 あ 行など لح 余 Ŀ) 0) ばなりませんでした。 配 n ŋ ゥ ち 持 あ 67 た上に、 が ·ました。 退治 まで考えると寝つ つ ち つ 神 る ノミ 会場 ても 平楽を 初めてのことで、 たほどです。 時 ま コトを私が演 で 間 で に の緊張 神 が 61 演じた中 ましてや、 集まっ 67 主 楽 ほどの 一役であ 0) 時 出 間 は 公 た で L لح

> た。 ほ な 見 いえぬ 物 つ () と 拍 充 L 手 たと 実感に を 67 同 ただい 満 時 たされ に なんとも たとき まし

少し

ま

て三 お話

团 L

体

が

口

ン 日 0

k. 本を代 内

ン

0

ここで、

海

外

公

演

容を

ただい が あ 方に上が 芸 ネ 最 同 いを その 能 イ 高の 少し 言葉 講堂 を た 後 収 の自信もできたこと でも h 7 つ は つ 穫でした。 7 か たことで 通 口 もら じ ŋ 交 ン 舞 流 غ 台 なくても ۴ つ 観 公 ン て、 大学 t 賞 演 参加 観客 して を実 Š 伝 ブ ル 者 12 0) 13 施

これ か いらの 展望

n 場 0 収 自 لح え を b نح 0 ます しな 活 なげ 分たち に て ち を多く お 育 今 お ろ 積 発 n 成 後 0 に T が ŋ 6 地 が 0 極 またこ す 0) ま 域 1 5 進 のこと あ 課 的 け るこ 知 め に ŋ 題 13 たらと考えて 後 5 7 根 ま ٢ 出 とで、 ざし 0) 継者 して、 な す 機 か 院会が ような活 きた 文化 が 1 it た活 0) 文化を吸 てい 発表の 後 育 あ 1 0 今まで ,と考 交流 るご 成 動 継 き お 13 は 者

客 0) 皆 3 ん か 5, 惜 L Z

が、 HJ いただいた皆さんへのお礼と、 づく これまで神楽を応援し ŋ に少し ば かり貢献 で 7

後継者とともに(前列左端が宮田さん)

す きることではない かと思い ま

お 声 うことです 芸能 61 1 0 う思いと、 まま 機会がござい 中 が 若 がけ で、 が あ 私を育 で い者にはまけ ŋ いら を 気 「若者との付き合 神 分が 1 れる。 ただけたらと存 h 楽 まし でく 1 つ つまでも ん。」 たら ま لح 12 たと ŋ いう 是 伝 ٢ 非 統 崽 67

じます

ドに誇りと生き甲斐 中町 町並みガイ 甲 南 つ 百 寺 橘 原

品 格 ある我 が 町

現

存

して

お

りま

11 和 拼 0 人 ま 盆 私 町 0 地 12 0 で 静 13 た HIT す か あ 標 は 0 周 な n 高 囲 H を 遠 百 人 0 緑 歴 約 0 史 Ш m ٢ 万 0 並 文 宇 13

لح

5

13

発 4 達 つ 弥 き 牛 早 7 時 2 代 ま か か 5 5 た。 高 多 度 < な 現 0 文 在 人 化 が 発 掘 住 が

和

史

化

博 六

館 +

が

緑

成

月

中

腹 文 平

13

建

設 物 年

さ

12

ま

L

伊 推 さ 11 を 13 子 古 続 12 誇つ 名 0 K 7 天 が 明 皇 لح 1 7 届 Н る 0 出 1 き、 香 遺 T 御 た様 0 お 物 代 豊 里 n か 小です。 かな لح ま 5 は L す b す 稲 7 そ で 作 遠 0 中 証 文 <

17 明 町 ょ 7 とし た n 予 لح 治 江 Ŧī. 氏 0 氏 帯 純 7 歴 が 参り 宇 期 戸 0 宇 --から 後 を 友 見 史 が 時 中 松 ま 的 13 7 和 和 年 褒 を 京 ま 代 心 す なるま 宇 島 間 葉 平 な 0 都 賞 百 ま 13 地 事 和 が 城 لح げ 13 0 九 な た 島 城 な が 亘 を 公 た 柄 L --つ 家 で 在 藩 下 拠 橘 つ 城 つ T あ を 年 7 であ 繁栄を 郷 唯 町 7 F 点 背 少 7 遠 0 間 1 HJ 伊 町 لح 13 治 保 海 L 統 ま る لح 0 な 達 لح L が 賊 振 8) 治 て三 氏 n つ L 宿 ŋ L 西 以 南 た。 13 園 づ 7 場 ま す 後 返 予 藤

[几] る 12 ľλ 2 ò + لح た 0 そ 幕 家 八 HI 年 0 3 並 末 並 周 13 が が か 0 辺と そ あ 5 中 文 ŋ 0 明 13 共に 11 ま 治 県 ま 期 0) 中 選 里 残 13 か 之町 定 5 つ 建 を ٢ 昭 7 7

n

11 保 13

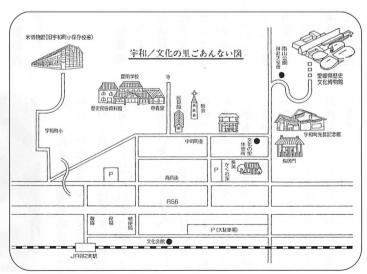
7 文 校 古 7 る 受 お 化 5 0 明 17 ま 0 ŋ た は 財 校 12 治 家 7 ま 幕 13 + 並 お 末 指 玉 西 Ŧī. 0 ŋ 開 0 定 0 В 年 中 ま 志 さ 重 明 13 本 13 す 士 要 学 れ 最 建 あ

指 英 ま 宮 あ 同 1 追 高 0 わ 門 野 定 敬 る つ わ 隱 た 12 時 長 文 作 で 12 11 家 た 蘭 英 を あ 7 財と 学 n 鳴 遁 が 頼 高 が 走 つ 者 親 滝 幕 県 野 7 友 塾 0 府 で で 0 長 箬 7 15

こん ま ち は 7 秘 で 1 0 8) る 0 百 13 Ġ る 町 家 年 12 た歴 並 間 0 文化の 人 を 格 Þ 宇 調 史 ŋ 高 を 0 里 誇 < 밂 n 住 杯 位 そこ が 4 つ あ 続 8) を

0 た 11 県 0 並 乊 b 歴 0

ボランティアガイドの皆さん (右端が上甲さん)



た 以 か 上 らだ 0 様 لح な 思わ 12 的 ま 背 す。 景 が あ

つ

動

さ

12

小

さな

0

町

0

達

ボランティアガイドの 発足

との か Ŧ. F. 者 予想 かり 年 を で 和 0 歴 六月 で 話 作 は 郷 增 博 ź か L は 対 土 つ 0 加 5 ょ 合 7 応 文 が 誕 た ŋ 化 は ボ L 見 11 生 ど き 2 が ランテ 保 込 15 宇 う 存 ょ 0 な 12 ま 和 会の 準 さ で なく 12 つ 町 備 れ あ 1 7 を考える ろう な 7 12 現 ガ 平 取 る 在 来 成 か لح 町 ŋ 1 0

K. 先 ブ ず " 案 ク 内 を 0) 作 基 成 本 L とな 次 る 13 ガ で イ

> 盽 7

でガ 足致 代 九 ろ、 広 名 報宇 しまし 平 1 -|-成 女 Ŧ. k. 和 六 六 名 を 年 名 0 慕 ゃ 応 集 「公民 九 二 十 月 慕 ま + が 館 代 あ L 兀 だよ た Н 5 ŋ とこ 15 七 ŋ 発 + 男

者 0 修 に当 $\stackrel{\cdot}{\equiv}$ 後、 0 金 れ ガ より て、 曜 平 1 成 \mathbb{H} F. 七 六 0 毎 が ケ 午 月 年 始まり 後二 月 兀 月 0 [] 時 基 ょ í ま し ŋ 礎 間 第 来 勉 を た。 訪 強 研

動 感謝の言葉を励 みに

感

義 見 来 堂 ま M 0 す 者 غ ، 由 0 来 反 15 心 先 43 つ ず Γ, つ 開 て深く ſ, j 明 て で 触 は 咸 12

など 気 T た び な な で b 場 つ 教 涙 童 古 室 15 が 平 歴 町 0 つ 12 授業を受け 切 が か か た 科 t 心 や 1 驚 ſ,) 素は 際立 声など心に た。 た。 な で 素 静 そ 史 並 教 書 15 才 模 5 5 か か 15 あ か れ が ŋ 離 擬 15 晴 科 0 帰 ル 12 る l, γ 15 を 大 授 る 5 V つ との責任 ſ,) つ 12 書 展 る つ ガ ま 教 が 変意義 業は るが 1 たと す。 0) お 町 そ 7 ょ 示で ン 育 を 等 4 って、 うとなさら 15 く 0 7 見 で つ か ſ, 7 埶 合 が 深く残 殊 لح は ま 言 人 1= 驚 つ は 0 ま 心 つ 0 ここの き 人 ŋ 達 息 深 心 す 17 つ 小 た明 で 者 7 立 外 当ち ま k L が 秘 が て 各 7 学 づ のよろこ 1 あ l, γ ŋ 喜 す が た 大 る人 歌 8) 行 中 自 唱 1 つ 治 ま ま ば 秀 切 5 すす。 事と 15 その لح て つ 学 な 2 が わ 歌 0 た す れ 言 な 囲 13 1 れ 15 校 達 は 習 12 15 教 か

で 水 わ 12 長 館 沢 な 英 7 長 市 お z 高 1 ま 訪 大 6 野 す。 変 ょ 問 長 お ŋ 英 L 世 た 0 皆 際 故 z 15 郷 岩 な 6 記 手 1) 念 0 ま 町 館 県

> す。 問 大 御 H 頂 L 者の た。 変 きま 挨 父 感 拶 か 皆 二宮 動 L を 兄 2 た。 さ が 61 1 12 た 助 敬 15 る だ 11 作 لح お 0 て l Λ 先 伝えす が た 頂 生 阼 印 0) 1 15 H 象 を た 助 か ると、 か 的 17 で 訪 0 阼 7

す。 史上 史 功 \mathbb{H} 左 L ささと 0 績 本 氏 ま た 珠 扉 0 初 0 を 共 0 Ш 人 伝 端 に、 開 火 統あ 物 か を 矢 村 田蔵 幕 せ お 楠 る 宮 7 伝 本 末 町 敬 え 貲 1 六 15 並 作 つ L ネ お 0 を 小など 蘭学 T て、 1+ 素 始 1 る 晴 X) ま 歴 0 0 歴 5

そが え 8) 物 寿 持 を 先 0 ょ さ つ 自 妙 生 う 次 袓 て 6 分 薬 0) か き 45 が 頂 0 ら受け だと思 睴 世 あ お 田] < 代 斐 ŋ 嬉 伝 0 で ま ż 良 って さは 渡 継 あ せ L さ ŋ す 6 て を お だこ 何に 0 誇 ŋ ります。 不 感 5 0) 老 動 b 12 か 務 15 長 礕 を

なけ 12 ばと思 っております





開明学校授業風景

が 話

九九九 時代が変わ 何 かが芽生える:



みつば会」の誕生

で、 家 援助や介護を必要とする場合 な 出張 13 庭 や 地 時、 を留 る 要介 域 旅 家 12 などの為にどうしても 派行」「 2 族 護 お 守にしなけ 0 0 者を抱 住 農繁期」「休 皆さん 13 ま か、 13 えて 0 定 12 が 方 ればなら 期 1 K 慶弔 ・らっ 的 0 息 13 中

> 年の ご家 に、 るため ・ビス」 11 み が庭を 九月 専 皆 つ 0 P9 لح 末 ば 助 さ 訪 0 会 It 2 して 間 ホ 発足 あ 0] L 負担 で 1 介 4 を す 0 護 在 \wedge 0 会が を 宅 ル 0 平成 た 代 福 軽 18 ば 私 減 行 祉 1 か + 達 す ++ が

では 皆さんの希望の でお手伝いをしています 通じての活 Ā 現在は なく、 のヘル JA三間 動にはなります ١° 社会福 |が一ケ 多い日曜日に、 祉 町 支所単 協議会を 月交 が 代 独

年以 えひ 二十 三間 8 < ル が ま 0 三年目に入ったところですが らす。 の方もいます。 12 者 パ 三間町支所 進んでいることになります。 中 J でも で 1 上 九・八 N 8 Ā が広域 5, b 支所 南が とし 全 高 早 E 齢 は、 老 て二十名 l, 平均を十 %以上に 発足しましてから 化率は高い方で、 では、 健 か ~ 合併して、] えひめ南管内 施 ス 設 が資格 等 対 J で 年~二十 達して 高 応 Ā 0 J A (T) 齢 お お 取 化 勤

> ま ۲ 手 せ せんでした。 12 伝 る せ は私 13 活 0 は 動 か な だけ 0) < 場所 13 取 8 0 った資格を のでしょう として何 悩 みではあ かお 4= か

くら 動 た を V 達 ち めに 深め も出 に ました。 平成九年 8 会議と称 積 南と 13 席 b 0) 極 割 姿 J L L ても 常務 て地 高 Ã 合で話し合 八 勢をもって臨 齢 0) 月 者 役割を果たす 域 頃 5 住民 に対する活 1 部長、 ケ か 5 月 との JAえ 13 をも 課長 ル み、 絆 パ

三間 所となった訳です。 あるという考え方から、 13 新 つない 5 町支所がモデル 活 でゆく必要が 動 分野 0) 開

ととして、 う による実態調査でした。 n 健 六 げ 病 康では 割以 たの で 気 私達が最 す。 13 番 は、 上 な の ない J 0 不安なことは 家事 方が たときのよ ア 初にとり A に 望 ンケ 状 態 援 あまり 助サ むこ に] あ

> 期 定期 1 動等でした。 待して下さるんだ! ビスを筆頭に、 的 な巡 П 訪 やはり私 問、 日帰り介護 声 達 か 頑 K H 張 b 運

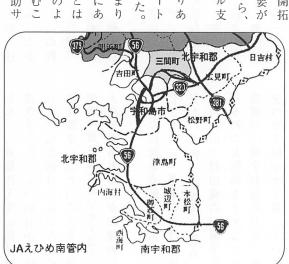
四 回 の給食サービス お味はいか が

月

5

なくちゃあ。」

5 期 平 食 にとい 成 + 12 5 7 1 + ょうどそ ビ 年 1 う ス るとのことでした。 度 案 0) 事 業の 0) なるべ が 頃行政 着 取 < 々 n と進 組 早 で 4 1 時 8 を 給



か

ビスのひととき

で受けも 0 げ す て、 かさ たちました。 加 J 運 ず 0 て、 受入 つことになり Α ま 12 社 ル 0 J A と I さき 協 を 18 お 1 か に手 5 願 有 資 商 0 1 を 委託 しま 店と 格 年 者 あ

٢ る 世 以 が Ŀ 人 帯 の食事を配食しています。 を 0 用 (う 者 対 食 独 居老 は、 事 で 合 象 に、 0) L た。 によっ 支度に 人、 お お 民 生 毎 又 む て決め 委員 週 木 は ね 火 高 -0 さん -|-曜 7 齢 Ė

> して P 5 0 入退院とかで今は少し減少ぎ せ 忘 地 る 2 最 メニ)たが、 初は三十食くらい 7 れ ŀ. 元 つ < います。 ぬ 0 よう 味 新 冷 イ ユ 特老ホ 鮮 凍] 0 ス 1 b け 安全な食 食品は使 町 を参考にさせても 1 13 受けなが の栄養士さんの 等大変心配しま b 皆で力を合わ 4 気 でし くばりを 材を活か わ 「美沼荘 ない 5, たが で

ぎ時 ちょ 安 風 T あ ŋ 否 邪 心 っます。 ぉ 間 つ 確 を のこもっ と 認 ひ か 0 話 わ は か 闘 す 心得 12 V) غ نا 13 た 7 あ 13 お た V) なることも 介 b ま ま 八 当 0 せ せ 分は過 を で 6 6 持 か か す

ミニデイサービスにも挑

ル 7 13 で、 まし ス 0 先 を 試 Н 三間 2 Ŧī. 月二 L 地 間 X NT てミニデ + を対 支 日には 所 象 サ に行 ン イ ホ サ 初 8

び か + H £ を 才 以 上 + 0 独 時 から二 居 起人に 時

呼

当 あ が < ん 頃 べまで、 できました。 n は 0 りまし 協 で、 み 力 楽し b 0 た ほ ば あ が ん 会 0) 1 Ⅲ V 会をも 会 お 0 とときで 員 昼 保 つこと 0) 健 0 手 婦 お 弁 づ さ は

課題山積の中で

が ż か 0 たら、 とって見ても らです ただ食 なくなったら?」 ビ スに 事サ 111 L た場 から 週 Ì 0) 合、 間に ビ ンス事 # 間 A か 額 題 人 とはこ 0 数 業 度 5 助 0 が V 0 成 増 サ 12



お味はいかがですか?



私達が真心こめて作っています (右から3人目が兵頭さん)

助 食 成 んはどう 事 サ か? ビ

て、 前 ょ が つ てくれることを信じながら。 Ĺ 7 活 業に、 進 動 は 来年四 社. 方 たい 本音 得意 面 が 12 協 を に 0 0 b 架 月 J 踏 科 Ŵ 話し合いをもち、 私 Ă 0) E H からの くために 台にし スは女性 いです。 達 橋 で はあ の夢を ともに 「みつば 介護 て、 そうし は、 ŋ 部 保険 叶 相 ょ ま 会 連 す 行 n

談

論

高齢社会とまちづくり

をは

全く が、 躊

0

る。

体

何 7

書け

ば

ſ,) 素人で

67

0

か あ

見

当が

つ

聖カタリナ女子大学 社会福祉学部教授

下丑

る と 0 を 高

「まちづくり」に

つ

1

踏し

た。

忙しい

こと

8

JE.

まれ 頼

ると

いうことで

原稿

社

会

や \langle

福 ŋ

祉に

関

す 1

る

セン

依 組 齢 ま

が

あ

つ

た。

私

は

ち

ょ

L 恵 な なけ を絞 か った 素 か 12 人 んのであ ば は な ٤, 素 が 折 5 角 人なり 0) なんとか つ ſ,) つい 1 依 無 頼 \overline{N} 形 1 0 知

0

な

Н

本

人

を

演

ることになった。

兀 計 老 進 が لح 年 人になるとい では 行 さ 齢 伸 0) 吓 て、 人 び 時 ば 代を \Box 12 割 か 現 少 7 -|-つて「人生五 子 在 迎 13 たが、 中 五 高 ż 人に た。 頃 1 齢 1. 紀 厚 11 今や は 初 生 が 平 人 急 頭 省 均 十年 弱 人 八 1 0) 速 寿 は 推 0

> は、 を つ 社 増 8 た 後 会にお 7 果たしえるかどう 明 加 重 0 2 一要で 子ど る 高齡 いるように思う。 h す る なことを考えると、 8 8 ſ, 7 高 あ 社 てど 齢者 のに 会が る や が 現 役世 0) 自 なるかどうか よう きい 身 私 か から は 代 な役 1: の役割 む か 地 か 割 域

よう できるか 現 極 お 役時 的に に思うのであ 年 寄り自らが老後を 代のはじまりと捉え、 否 地 か 域 に 1. 関わることが か か つ 第二 る

積 0

ば 恵 0 年 起 売 間 5 つ さ 長 たと i たち 社 す 0 12 野 平 漬 は る 青 県 て 成 が 年 0 な 九 んと そ むら る。 年 合 う。 寸 1 = 0 村 小 0) 0 p Ш 版 炊き込 公民 平 約 売 お 特 そこで 村 0 こし 産品 厚生白 名 均 八 上 お 0 みご やき 億 年 館 事 げ 互 齢 円 が を 活 は 例 企 平成 書 飯 Ŧī. に 業 生 動 が 0) 13 産 紹 八 0 昔 1= を 歳 知 ぼ 五 販 帅 は か 介

きり

自宅

で寝

たきり

が三年

以

Ł

の長

期

寝

0 を で 生 あ 産 成 功 7 1 る لح

まち 広く 望 役となって 1 化、 む高齢社 ツ 2 いをつく 等の分 、自生 0 種 0 会なのだと思う。 る姿こそ私 活 活 野 教 で、 躍 地 動 域 が 高 環 0 全 齢者 住 境 経 玉 たち 2 済 各 ょ が主 地 ス ポ 文 が

と推 生省 あ 大 8 者 Ŧī. \bigcirc る 齢 4 化 ると 要援 0) 寝 勘 総 年 年 者 出 0 L 案す 課題 1 13 は、 たきり 計 進 かし 数 等 1 護老 は二八 展 は T えるか る は 五 て 五 何 介 は な ٤ 1 る。 人 5 が 介 \circ 護 13 なっ 0 る。 0 0 を、 問 護 か 種 5 b 万 万 0 問 高 万 題 そ しれ 来年二 て 人に 介助 題 齢 人 現 人、二〇二 で 0) 0 急 いる ٢ 在 あ 問 速 0 社 解 達 を つ 題 会 0 0 る な \$ する $\overline{\bigcirc}$ 要す ゟ 高 決 0 推 障 が 厚 齢 で 最 計 高 生

で

1

果

た

え

な

13

よう

な役

割

80

5

12

る

ま

5

づ

<

が 割 護 さ 約 憎 寄 11 7 1 せ 物 \equiv 女 が 11 す 者 L n る 0 7 13 割 2 性 Æ を < を + 介 b 介 方 12 行 と 歳 護 護 0 介 な 問 け 護 以 話 13 L たこ 題 は な つ 者 上 7 た で 67 61 0) と 要 う る 次 情 と が 介 ち 第 報 人 端 1 を 1-夜 ゃ あ 護 約 0 つ る 者 示 深 た b 儿 約 買 刻 介 寝 人 15 割 八

会こ 頴 た る 的 主 13 が を 1. 役 T 先 取 中 そ と 12 高 高 ŋ な ·L 齢 組 0 地 Ł 0 齢 7 域 す 社 者 む 深 会で 2 が 0 刻 る È 化 0 高 福 役 が 解 祉 す あ 齢 決に 期 者 分 る る 15 待 自 野 介 と な さ 積 5 1= 護 述 る 問 社 12 極 が お ベ

が 理 あ あ 障 健 な 結 が 現 高 解 低 لح 0 康 る 実 下 0 齢 b 力 あ 上 者 12 は す Oあ 動 ハ る が か 低 る 作 割 間 る 人 高 下 لح 0 題 5 0 は 齢 で 俊 方 住 は 繰 L 約 者 Н 2 2 1) な 7 敏 は 常生 性 ょ 3 返 13 8 健 割 言 Ł や 康 L 13 L (つ た 13 0 IF. なの 活 ま 知 あ 7 ち 調 識 確 13 な 元 ŋ P で 支 気 る 查 4 z

> 11 如 < る n 何 0 15 0 で 発 た あ 揮 80 に す る そ か が 0 間 パ わ ワ 12 1 7 を

L で 対 13 見 な う 高 齢 消 方 は 対 か 1 見 齢 者 7 L 考 費者 が必 方に えて 者と な か 像 7 61 与. 利 を 7 ·益者」 要ではない 終始 言え b か 自 0 他 12 自 徘 2 か か 等 立 ば る る L **他** 5 一受益 てきたの 必 Þ は 要 利 あ 語 か。 が 他 者 ま 今 新 己 生産 ま ٢ ŋ あ た 律 依 で で 15 と VI る な 存 高 13 は b 対 0 0

域も

活

動

を

積

極

的

15

Ł 住 築 す は 7 L ン 優 う 7 デ 位 で 行 民 な る 地 > l, 立 0 ン 0 あ た ス 败 が 域 0 中 と る 場 を لح た 80 行 關 1 で 0 1= 1 住 ス 政 13 0 立 2 う テ 従 関 で ち t 4 ょ V 来 係 \$ 行 依 コン 0 1 す n 才 営 な L 政 存 が 3 4 ょ 13 お 利 フ う 行 と ٦ 1 13 0 へ デ 1) ころ 政 12 プ 13 7 反 企 ク /発と な と 行 地 か Ł 業 1 対 域 13 ス ~ 政 5

> と を لح が 思う。 協 求 11 担 働 8 つ 1 た 5 コ ス 12 Ħ. タ る 1 ブ 0 に ス で ダ 協 を は クシ とる 力 な L 1 \exists こと あ か ン う

連 そ か う 携 様 12 る な 高 な た が 分 齢 新 5 野 者 で が 1 自 他 主 1 役 発 0 と 的 世] ジ 代 な な 地 0 で

描

て

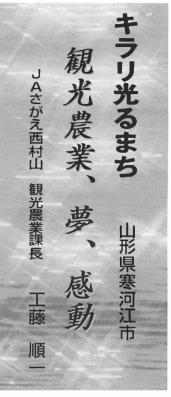
そ لح 7 合 体 高 民 域 n 0 体 0 捐 展 ま لح を と う 的 80 主 全 が 独 行 す 開 が つ ち 高 発 なま 卷 つ 的 体 5 n 0 す 政 る 7 き 交 齢 0 な 13 な ょ や や 中 た る 0 ち さ 社 込 が 流 で 活 価 b 活 や 企 ょ ŋ づ 業 動 会 せ 6 地 値 通 V) Ł を 動 ま う < だ を 12 7 域 じ を 1. す 深 や 地 た 求 n 総 全 لح る 地 な る 80 7 域 展

0) Þ か であ な < 意 L る。 水味で 7 高 + 齢 者 0 世 世 紀 紀 は

な色



(参考)長野県小川村の「おやき村」 縄文住居を模した建物の中で、昔ながらの「おやき」が食べられる。



こと

が

0

条

地

域 絶 が

0) 対 気

あ

5

Ø 件

る で

業 あ

種 ると考

さまざ

体

体

0

0

人々

持ち

を一つ

13

する



光農 業のまち寒河江

六 工 さ 人 隣 中 Ŧī. 1) < 0 接す 央に 寒さ 純農 万 河が 5 人 ラ 河 あ 6 る 江之 村 人口 0 ン ŋ 江 ぼ 市 地帯 K 鼰 は、 市 0 光客 の観 里」 お Ш で、 13 ょ 形 Ш には、 そ四万三千 が 光拠点 でも 市 形 日 訪 0 県 のほ れ、 本 西 年 あ 間 北に チ る。 0) ぼ う

> 王に次 農業の ち三〇 名を知られるようになった。 成功 \ < ° 0 寒 万人が観光農業を ζ" 秘 河江として、 観 決は、 光 東 地となり、 北地方では、 いろいろあ 全国 観 蔵 光

づくり るが 挑 係 相 う。 V) V3 15 な人々 互に 戦 道 は が生まれる。 が あ 出 ネ 大きな要因 ット á は、 走って来たが 来 協 لح 私 0) 調し は、 な 0 みである。 ワー か b ネ ット つ ち あい支えあう関 地 た。 クができれ であ これらの関 ろん一 域内外の多様 . ウ 1 前例 ったと思 - クづく 朝 何 事 0 ば Ŋ 係 な

づく 観 h 光農 地 業を中心としたまち 域おこしは 地 域

楽 す 鼰 抜 0 利 <" 年 た 光 組 まな曲 制 引っ のがー る一方、 光農業の るみで進めてきた。 農業推 織 0 lt 害にこだわってい である。 を作る 駆 であ 人 張 17 折 Þ 九八四 も許さない。全ての ŋ 進 を ことに る が とに 窓口 以来、 協 あ 寒 経 1, て、 議 会 は農協 河江 L 致協力する かく地 阳阳 中傷を生む。 官民 た。 何

よう、 交 地 "7 4 コ列 を組んで取り 通など各種業者とスクラ 域 内の J R 車 飲食、 と連携し「ト を走らせたり 旅館、 組んできた。 商 店 口

L 5

外外

貨

を落としてくれ

る

ある。

0)

観光客

が寒河江に「着地」

に統

域

外か

周年観光化と商品づくり

ŋ 前 だけ は 寒 ほ 河 0 と 江 年 6 0 どさくら 観 間 わ 光 ず 農 業は、 か三十 んぼ狩 以

> 見て、 が受ける 晴らし なら ٢ 幸 である。 13 康であ 絞 人 であった。 って来る。 あ あ る。 は、 る。 b) 地方に、 一商 63 K 商 を呼 品品 果樹 な る。 る時 本 밆 触れて、食べて、 まず「本物」 開発 面 年 13 物は DL さらに夢、 白 間 は べ 次に が これ 体験を求めて来る。 季 ゆとりを求めて 代 企 をする際大切なこ 途 豊 るように 何 だ。 安心、 続くようにした。 8 とか年 富だ。また、 画であ 切れることも ある。 ではどうに 遊 人々は農 安全、 る。 び心」で の提供 した 間 ロマンで 智慧 通 そ L 動 (素 4 村 12 健 7

和 事

五十

儿

ては、

足

個別の も地域 市

が

誕 周

生し 年観



クレ 室に きの てゆ 曲 常 事 を 思 利 밂 7 ラ 浮 えなな 用 に が 15 が まず き、 くつ という ならなかったバラの 予 か オ 広 人 0) Ŧ つ ヒ 八る。 花 個 た パ ン か 約 n, h) そ を か て入浴したという故 卜 が 1 桃 13 意図も ラ 0 ノバ 温 火 0) 源 l, _ ラ風 短 が 豊 ラ 泉 š 商 大人気商 つ 郷 色と は 0) 밂 か か ぱ バ 0 となる 呂 あった。 世 な香 次第に 湯 を ラの花びら つ たり 紹 の も ŋ 船 で 寸法 ŋ に ど 八 介 品 あ 有 で 0 が 開 浮 ŋ 分 L る。 で 効 商 浴 咲 1 か

> る。 ど

う。 やっ 0 ア ス 0 内 _ マ コ 面 面 0 次 白 てく ア ッ K トラ ちごを ŋ 0 チ 雪を見 が受け る。 玉 雪 雪 لح 受け ス 0 々 中 な 1 か な 卜 摘まむ。 いちご らも た理 てこ がら、 う 12 1 沖縄 季節 ネ は 由 1 鼰 12 狩り 光客が も大ヒ 感の */* \ だと 白と赤 3 雪 や ウス ン 中 東 南 3

手 づ 地 < 元 ŋ 農 林 新 水 鮮 産 物 無 を 添 使 加 つ 0 た 加

> 二五 工品 菊) 61 一売上 0) スを求 味• ユ 0 が である「こだわりアイ 摘 ニ | の前 他 円 げ 圧 み 13 め る 0 倒 ように でつくるその ク 一 合 Ł 7 ア 的 来る な 1 **₹** ts: スを年 商 格 人気を お なった。 밂 つ りんご」 てのほ 客さん が多数 間 誇 生• る。 ス な T 億 き。 Ł あ か

円

イ

た・も

多

等 の ぼ 1 ~ 狩 ハリー り以 の種吹き飛 Ł さらに 体 掘 験メ ŋ 狩 下、 ŋ メ ニュー、 等のもぎ取 裔 b 1 ば 麦打ち、 ン t のさく L 狩 h, 大 会、 さくら 'n られ Ġ ブル 観 雪 6 光 ん ぼ 煮 Ì



ス」

こだわりアイ 人気の

> 大 年 落書き 中 何 かが 大会等 行わ 0) れてい 1 ベン る。 卜 لح

感 動 は 双 方向

われ 草、 づ 6 摘 换 信 業 n 立 15 観 かない み L 念でや は 密着し 光資 نح なことをばか見たい 派 に ても 無限 当り た な商 石こ 0 として売り出した。 地 源 1 ろ、 域、 つ す 0) 밂 だけだ。 前 は いではない てき 観光 ぎて 雑草取りも で あ で ど あ 景 あ る 0) た。 資源」 る 色その () つ 農 農村 るた たり、 そ 山 発 12 私 村に 想を と 「七草 は b め に が と言 「そ l J 0) あ 15 あ 生 f う 転 b 気 ま る

たら 人 に 耳 でなく、 ズを知り 情 ること、 々 そし と舌 か 0 という字か 歩と け、 て、 休 集 集 め ま 自 観 たかっ 使 なくてはならない は で 全身を使って今の 分 生きた情報を集 るところ、 光客の本当のニー うことで あ の手と足と目 体 んら、 たら、 る。 を 使 0 とは を引い 7 街 あ 頭 だけけ る 歩 店 80

> か 考えると で 踏 ることも体 5 あ Z る。 ボ なくて 出 ・ラン すこと、 言っ さら 験 テ は した。 1 ても に、 誰 行 P Ł で つ 地 動 ľλ は 実 域 するこ 失敗 てこな 際 全 体 12 لح す 儲 を

る。 る。 くら か月 伝達 網 b 12 視 0 ば 世 なら 野 整 ſλ b は 企 昔、 スピ 備 12 早 12 圃 ない 入 ľ は な 1 つ さらに三十] 12 対 先を見て 0 三年一 ド時 た たと実 応した広域観 また ľλ 代。 لح 八感し 1 思 道 昔 路交通 てな から って E 情 7 報 光 lt 昔 0 13 ſλ

どこ る。 L る側 0 n 身 きること、 ŋ 味 す É ,感動 組 軽 わ 合 最 うも 0) ľλ ľ もうとし 後 発見することが も 言 E からだ に、 は 一葉の は、 て、 迎え 0) 0 「誰で 人 観 で 観 て 0) 子ども る はな 光客が 私 b 光農 つである。 がこ 不自 側 誰 ŧ る で b 業 共に 大切 0 観 12 t 由 b が 気 な人 方的 お 光 か 参 仕 生 軽 で 5 感 農 加 年 2 掛 取 b 寄 あ 動 H 12 出

リレーで
ちょっトーク

ん、Y!」 られん、なられ

私

達

は

活

7

社

会

一を作

n

た

1

と

願

0

7

刻。松山の空に八月十二日夕

ま 13 踊 IJ 際 1 元 しく約 身を包 n 街 ズ 組. n 気 4 0 を 歩 か 0 野 杯 31 き 5 13 夜 踊 球 三五 合わ ま 大 拳 は 0 n 街 声 す 年 黄 逋 お 〇名 が 12 道 せ 捻 色 が 木霊 ŋ لح そ 7 n で賑 鉢 紫 干 \Box 野 大 度 6 しま 公会。 卷 0 な 舟 1 0 球 きもも 町 プウ 4 松 11 中 拳 か " 約 Ш 勇 ピ لح エ 0 几 ま

お 携 π 15 は ビ 0 L 12 参 年に発足致しました。 三十 ľ 1) 年 を たき 対 お 11 加 を促 図 寄 す 8 年 然 L ろう 名 る 医 1) 1) n 寄 7 そう が中 を 理 療 ŋ を 1 13 含 解 0 通 る な む 心となり を 来る 保 社 L 5 0 会参 ボ 深 家 7 連 健 か ・ラン 8 超 . 我 族 よう 加 障 で 福 が 高 テ 齢 とリ 害を す 祉 地 松 九 1 社 O域 لح 九 ア 会 連 を \$ 楽 Ш

L V) 今、 達 う 0) か 社 な 会参 ぜ 障 害 加 を が 5 必要 つ な お 0 年 で 寄

岡田

純子

で ż 寄 t 7 代 n 勿 あ 0) 13 出 論 流 な 来 ま 来 る 12 つ す だけ 13 て る 戴 超 則 自 高 L う、 た 立 齢 働 L 社 لح 会 き た 12 か 1 お It う 年 備

笑顔の似合

松山市

L た 1 人 が当 7 12 た 以 F n 前 13 13 社 参 会 参 加 で 加

> 結 さ T 害 2 0 あ 7 た 15 る 活 \$ 7 脳 た 果では きた しをも に 多 人 条 12 p る 13 0 (J 方 卒 私 生 行 は 13 0) る 件: S お ま 中 は Vi Þ ことを実感してい 私 つ を え、 さえ 動 13 方 12 年 す 0 後 言 な 7 楽 力の 達 お年 実現出来 る 寄 が 1] 15 13 いるから」 聴覚 ま L 2 整 n /١ 言 のでしょう 無さ 人 方 寄り た 4 12 ż 語 達 ビ E 楽し た 以 ば で 士 0 頃 1) 障 人 7 故 だから 上 以 か 訓 害となら 13 つ と思 0 して主 いな ま に で片付け 80 13 前 安 5 練 生じ 無 る 残 心 L 障 を ます。 0 か 力が べされ 関 わ よう でき 害を 1 1 ? 障 方 た 心 12 4

> > でしょう。

17 楽 0 n 願 た 0 で三 車 達 L 我 11 13 土 人 椅 が 6 が 産 生を楽しみたい」 は 百 7 (子 連 今 13 ままならないの 楽 名 戴 0 0 1 0 < お は 障 な L ボ 年 害 至 た 1 ラ た を 極 思 8 寄 った五十名 ン b 当 n l, 12 出 テ 0 た 当 祭 お を 1 ŋ 年寄 前 作 冥土 りを P \exists が だ n

> 援態勢 ると何 か る。 動 協 年 声 具 動 パった」 的で 援 力 寄 き L ŋ を 小 は 7 百 送 6 0 道 لح な街 見 下 命 る 人 思 12 さ を 沿 7 なら つ に ľλ 輝 何 道 0) 13 金 るだ 生 ま Ŧ 0 下 7 か 集 戴 き 何 す 進 せ 人 方 8 でも る け 0 備 け T Þ p るこ で そ た 方 を t 大 7 0 8 が 含 更 出 ょ 支 K 道 来 感 13 お 8

んだり 然と 思 12 わ 近 は そんなお し合 所 なく住 でも、 た ま 仲 動 0 す 間 き 1 人 本当に み慣 膳立 、達と ٢ る 始 趣 不 8 れ てされ 時 味 た 自 優 た町 求め ŋ 由 4 L な な 旅 0 13 の祭り る た感動 笑 行 手 だろう 気 b 足 顔 を 心 0 楽 0 が を は 自 交 知

引き 連 今年 支援 街 E が 好 繰り 連 は t 来 態 きなこと 12 大 る 勢 出 勢 こと 7 松 0 感 لح 0 Ш 12 が 動 ボ ね を ラ たき 0 夢に た社会と 自 ン 嵐 然 テ ŋ に を 見 呼 1 ľ 出 0 なる なら ア び 来 0 を 13

是非応援に来て下さい!

楽力 双海町 直理 魚見

生きていますか。 ます。 生きる力」 みなさんは楽し が求めら <

学校 ら生活 お 8 元の子ども 大好きなここ双 0 チ 私は、 木 ヤキチャキの双海っ子 さんとして。 みなさんもご存知の通り、 Ŋ 7 H 生まれも こと そし いま る たちと関 0 時 美 らす。 (海で、 て庭 には きの 育 ちも ろ 時 わ 13 町です。 6 じり なん 1: りな 私は 近 な は 双 所 0 で 小 が 地 で 海:

Ti.

百匹だ!」と言って。

ども こん 担当して きって育てています。「まず 子 ば L か E を たちと一 地 あ を んらと字 ら宇宙 た。 元の 持つ どもたち) 本当に ただやるだ ない そう、 というも たちも つまった 町 年 グ 小 何 内 緒に 学校 い教 メダ 幸 \Box 宙 月から、 0 0 Ī 1 ま 楽 飛 t で輝 に思 母校 す。 で理 のであります。 行 材に恵 を分け カ 勉強 しんでやらなき けじゃつまら バ X ッ ルで したメダ } (卵千 ダカの学校 科. 週 か できるこ 思 ſ, 7 てみる。 まれ 夢の ます。 せ、 て頂 の授業 13 は、 六時 子ども 出 秋 あ カ لح は き ŧ 0 さ 先 لح を 間 は n 子 る つ n

雰囲気-君 広 空に歌声を響かせました。 ですが、 0 てくれた素敵な歌 海: 員 この子どもたちと町役場 II 然 ŋ 小 高 そ ま 0 生 1 H 島の にこ 私の 次に でかっ そろい か 4 と』を手話を交えて、 の夏祭り」に参加しました。 0 学生を 校 0) ŋ 子ども か 0) ン 曜 いなさ 生が ,ます。 、ら高 方たちとで、 ぼ 形 H 方 0 0 出 態 0 練習が始まると真剣。 番はあ が ſ, j が こよくきめ、 0) ってい んに披露。 と勉強を進めてい 教える うことで。 ような形 中 たちが、 校 夕方に もち 生ま 双 いと思いませんか。 Tシャツに ちょっと珍し 海 た子どもたち 0 ŋ 0 ろん勉強 での二十名程 なると、 ため 昨 ゚ませ です。 我が家に 態に 『海と空と 最 初 年は 中 に バンダ 学生 双 ん。 か は恥 の職 海: 地 作 あ 0 元 双

所のお姉さんであります。 ŋ 好 き、 私 楽 0) ースは、 いこと好 きの 庭

力宣言」します。思います。ここに

ます。ここに

近

「なんでも 塾」です (まだまだおばさんなどとは言



「双海の夏祭り」にて

まずは私から。 何 事もやってみるうちに、

海:

人

鉢で六千鉢です 花いっぱいの双

わせません)

とにチ くま 身につけていきたいと っちゃいます。これからも なんだか人生得した気分にな り」ができます。そうなると、 子どもたちと共にいろんなこ す。そしてそこから「つな ろんな「出会い」 しく生きるカー ャ レンジし、 楽しく があり · 楽· 力· を

た

000

000

風おこしのちかい 研究会議のこれがらの思 「情報」について思うこと えひめ地域づくり研究会議 誠 近藤 事務局長

くも

あ

さび

しくもあ

る。

61

る私

15 わ

は、

う

12

あ

るが 集う

変

7] た

X

b) えひ お 1 め 11 地 域 4 づ 6 \langle な ŋ 元 研 気 か 究 会 あ 議

> る どうして のことの が 元 0 な 昔はよかっ 0 か 紹 気 で どう b < だか であ 介さ な姿 あ な 思う る。 L 5 る。 ように喜 消 ٢ 1 11 を 7 気 息が る たり 見 ただ 7 持ち l J た って ス 0 た る 聞 か す ŋ コ 0 等と言うつも t んでし か と心 、ると、 3 か 漠然とみ な れな なと そ 昔 を 17 配に 0) 通 を 12 l J ま 思う 懐 地 L う。 ば な 分 域 か

b 土 私 何 5 た 他 か 外 行 た人 z 汗 る ち 政 O12 か 12 役 7 が ま b 12 て、 か 知 戻 0) 4 5 5 12 る そ れ 開 中 つ な な か てし な 放 0 1. ιJ j まま が さ は ところ 5 ま 12 L 12 頑 つ 眠 担 7 か な 張 ŋ 当 で か

を上 十二 きた。 \$ 5 徐 年 げ 研 Þ 15 7 当 1= 究 会議 初 で は か うことに 7 ク 1 (J E る ワ t 0

0 内子

+

月

MT

で

産

古声 丸

が

7

4 で

思 づ や 加 た つ う。 ちを大きく包 < 7 情 I か め 現 さ とす ŋ 11 報 在 と 12 る は た 文 る 1 つ 今に 商 少 呼 情 ン 밂 タ 7 報 なくと み込ん なっ な] は、 で 化 あ ネ 1 0 たも と私 そうだ b ŋ 波 "7 で 1 は 0 ιJ b は を ま は、 る。 は 思 私 は

b そ 確 チ ろ 15 現 Ļ 0 う نح が な 在 地 では 剕 12 域 か で、 時 だ 本 断 誰 間 な 来、 を必 It 間 競 0 ょ 0 が 争 だろ 情 要 流 b 価 人 が 報と へう لح 手 111 12 b 値 す 0 早 [1] が ば 呼 る 中 < あ 能 12 b ば で 丰 る な 7 情 ヤ 12 0 0 1 だ " 報

化 達 地 誤 を 域 解 さ 15 うことだ。 否 11 0 定 お 12 た 17 る 7 道 る 具 情 ιJ 1 لح It る 的 地 る 報 でき 别研 8 で であ 0 そ It か 0 あ 7 7 0 究 0 地 今

なるのだろう。 綻 ク が が L 袞 ええ、 出て たら きた ネ " 私 1 0 ワ フ

5 個 域 0 人 15 7 لح フ お は } L It 木 0 7 るの 話 得 を な で lt

あ

緒

1= ば

7

12

なら

とに もな 争に 全て出 と が ところ 嫌 1 対 う は 私 11 はそれ だろう。 ことに そろ 取 だ L 0 0 指導し 7 ŋ で か 地 名 組 域 あ わ 5, は 乗 12 ま な は、 で てく 収 ば な 7 n 1 か ŋ と 0 舶 ま 九 組 新 ユ 倒 上 地 わ め な ٢ げ 域 ア なこと L な な 間 ル ょ う が 競

初 を 振 は ż n ひ たが 集会 1 ケ 13 域 地 返 80 所 域 地 た 情 ま つ をよく て 别 域 報 0 で 通 0 n 研 だ 1= た 何 4 づ 7 考え ろう ょ 終 < 触 0 П 究 る 行っ う と h わ 集 12 b 0 研 る る 0 会 か な X L てい たこ لح 気 切 た 発 究 思 لح が h 時 課 足 会 う 点 題 議 す

間 内 子 町* は 町 並 4 か

0

で 7 把

は

な

0 握 \mathcal{O}

情

0 な

伝

11

は

る

1

k'

0

整

備

続 な 町 を 業 に 動 町 テ 観 中 It を 発 0 2 0 は ク 1 光 とな 7 信 0) テ Ŋ せ 中 を 13 Н 1 先 輝 ょ か 小 0 HJ. き は j 5 田 進 7 か を とし 没 لح Ш 地 今 近 ŋ ら 久 L を 増 は 自 で 然工 す 7 7 た 中 ア あ 今 万 手 新 暮 町 しまうこと 1 る 1 心 は 段 る 法 と 5 L デ は Ĺ を 0 67 L を Æ テ ン 森 打 双 動 や 全 た + レ テ 林 ち 油 き 商 E 活 崎 ワ

5

村

並

み

لح

新

L

1

う

ね

n

0

13 加 る そ 常 12 そうい な 人 L I を 題 13 る て、 13 物 す 集 間 に 地 0 ることを は、 題 常 域 で えば そこに 意 は 1 ある。 早く 識 自 取 分 を n 爱 先 決 0 か Γ) 持 組. 媛 L 中 5 る ち、 進 んで 13 7 で 少 中 地 限 な لح 心とな 总 整 新 67 5 たな 2 理 13 る。 13 ず 7 情 わ

ような気 考え たち そうで 0 は 7 あるに になっ 61 地 る 域 た ح 0 0 b ٢ 7 た か を Ł か た わ 度 わ 2 0 か 5 で 研 0 0) た 人 修

> き 本 13 ζ" 12 だ き L あ と な な 当 者 5 ろ 出 7 ば ŋ 13 だろ 0 う 0 0 13 せ 67 学 0) る 情 そ な 80 自 か 裏 š か そこ 報 ŋ 0 側 う 分 0 67 べ b 15 込 きこ が 地 で か 極 情 L 触 6 0 端 隠 域 1 報 れない。 12 で 生 住 が な た 12 b きる ること 民 0 1 言 まで 7 丸 は 0 لح 裸 で か 1 لح 13 1 は、 な L 13 方 は る つ Γ) なる は ζ" 7 を な ば b で لح 5 第 隠 す 31

グ

1 1

を 0

寸

ち

L

げ 7

た

13

]

マ

を

絞

n

]

こととした。 は と思う ŋ 7 る と た 目 フ そ 考え な き 課 か 的 才 研 合 6 な思 生 題 ٢] 究会議とし た お だろうか ち、 7 ラ 互 L Ĺ 情 そ 学 問 0) 13 13 「地域に学ぶこと 13 る。 報 6 び 題 b ょ 0) 1 な ŋ 中 が あ š 0 0 て、 得 今、 中 地 開 0 テ を で つ 1 目 域 5 か 7 催を行 H 5 12 指 1 地域ミ 本 13 マ 抱 合 る H 13 ż L 密 年 0 学 12 0 7 た 着 度

> 13 0 0 と ン か

知 連 7 中 思 グ 5

恵

を

出

Ļ

緒に

汗 お

を

か

絡

13 え 5 7 ル テ

ただき

た

Ŧ.

13

地

考 か つ

た

1

と

が

あ

12

ば

で

b

何 だ

か

緒

13

る プ

が

13

L を _ は

ŋ あえず、 運営委 員 0 中

> L ま

待

0

姿勢では、

で及ぶ か

時

1

起こる

0)

で

あ

30

0

人

0

ネ

")

1

ク

で

ば 語

る。

12 0

は 持

> つ す

0

出 ワ

会い

が 13

0

出

会 人

1

を 0

味

ることがあ

٤

出 意

会い

は、

万

人と

くことか

5

始めま

こよう。

13 13

š



昨年宇和町で開催した「四国へんろ文化」を 考える南予集会の様子



'98年度フォーラム フロアトーキングの模様

皆さん な 丰 域 軽 情 議 す < づ L 報 は る 人 きたい < て、 を 0 活 لح ŋ 求 多 出 論を 動 < は 地 8) 会 Ĺ でき 域 0 7 展 か フ 出 す ら発 1 開 会 な 5 こうと \$ 1 13 0 信 7 لح 実践 す 本 Ì 研 b 思う。 る ク 物 究 0

を

0 会 15

ワ

作 シ る。 つ 業 3 0 所 ツ 物 プ 事 研 は を 辞 究 2 集 書 会な 1 な は 雰 き

どと出

仕

事 ワ

場 1

合意に導く 造 ることを 13 クスさせ 張らず、 ッ 的 働 プとい で自 か せ う手法 た上 由 繰 参 な意見を引き出 つ 加者全 n で、 0 返し 事 で あ 柄を 員 なが 五感をフ を る。 実感 1) 5 ラ 形

くりを 実践 めているようである。 0) づ 近 ٦ 1 進 z < 年 L P 計 8 12 調 ウ ŋ 市 画などで違ってくる 7 查 } 4 民 、公共建 参 13 全国 など様 く手 地 加 的 域 型 法とし 築物 資 0) Þ けまち 注 な 源 分 0) 0 \Box て、 掘 野 内

電

クシ ∃ ッ プ ح は

7 ク ſλ

111 決め 行になる場合が多 力 合 通 常、 0 が 1 多 よう 強 テ < 1 11 人 ン と する の意見で 意見 グ など 場 0 形 対 合 1 式 4 的 会 発 議 方 な

L

か

しな

場

や で

研究員レポート

ショップに求められるもの

そこで登場 したの 手法である。 が ワ] ク シ

式

 \exists

通 言

やり 方は目的や参加 者、

名余 三日

りの

参 全

加 <u>#</u> + MT 九 组 ク

者 各

1

ょ か

る

研 五

修交

間

地

5

 $\frac{1}{0}$

が 会

流 が行

わ

12

た。

ク

シ

")

プ

 \sim

0

識

が

部 公

レ

< ワ

不]

安も

感じ 3

が

5

:験し たも

n

起

E

間

を

振

n

返 な

得 体 認

感じたものを報告したい。

集 で 新潟 皮切

県 n

潟 北 六

で 州 高 シ

第

Ξ

П 7 香 プ 交

目 今 北

illi

そ

を 知 3

0

L 創 す ル ッ

 \mathcal{H}

月 大 12 成 7 1

<u>`</u>

+

Ξ

E を HT

0

場

全

")

流

会

1/2 玉

県 経

な

雰 囲 気 づ < W が 大 事

か まとう Ł 肝 員 る 誰 とし لح いう不安があった。 気 L な 61 \$ て活 うこと 0 が 初 か 80 動 7 体どの 13 0 できるだろう 自 は不 物 分もうまく 事に - 安が ような 参 つ 加

ŋ 厞 で 気 も始 人とは まる かけ がら、 離 6 だろう れ、 身構え まるで祭 かとい た雰

7

そし

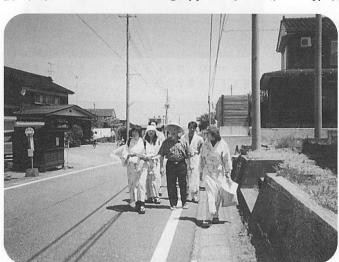
7

心 う L ようなリ た 雰 肝 気 ラッ で ク 安 ス

が、 が が で 0 高 17 1 雰 11 少 身 た。 を 肝 参加 と か Þ なけ 委 気 13 テ う 者 ね 12 ン シ るよう 12 溶 気 ばと我 3 17 L は 込 T ン が 6 た

泉 う、 b MI 1 0 15 私 う 温 を b 2 泉 が チ 歩 入ろ 0 体 ヤ き どちらが 行こ つ 験 ン [II] うと 1 L ネ を · ` でに た ル 知 0 温 う 3 は

> MI L L ラ 8 L 参 L 0 13 たり、 7 7 で た。 地 加 目 ツ グ お 得 出 ク 域 ル が 的 た特 次第 3 会う スし 1 を 1 あ か < 0 発見 自 つ 分 プ 手 徴 分 人 1 15 か た 作 たにイ 的 達 打ち解 するこ 6 雰 分 なも まず ŋ が か な 厞 0 Ŧī. ン 12 1 気 一感を活 タビュ と 地 0 lt HT 八 が 0 から その を記 図 合 を 人 多 中 13 程 徘 < l J で 地] 始 落 録 用 1) 徊 度 0



出会った人にインタビュー いろいろな発見がありました

な手法であった。 が 力 [図] 拓 人魚 か 13 人 Ġ 現 まち 伝 魚で表現するユニー 12 説 た 0 0 特 町と 未来を 徴 的 いうことで、 な 資源、 大潟 魅 町

0)

活

動で感じたこと

は

人

的

13

は

目

的

分

野に

ょ

して 要であるということだ。 开 2 味 加 0 を 合 述 連 気 h 人 で 人 なで 行う をつくるということ 0) 13 に () 0) 作業 考えを が くことが 頼 取 ワ 手 な ŋ は、 ŋ 分け \langle 1 過ぎると、 組もうという雰 なる訳 クショ 尊重しなが 重要 しな みんなが意見 (で、 で、 ツ がら作 全員 プ が の 人 意 定 重 参 業

三者 で か 従 交 が 住 来 えなな 5 個 民 12 は 0 性 的 で らの活動の成果は、 ほ 的 は 地 発 が 意外と気づ 見 域 な 5 遠 づ 成 b 0 < 果をユ あ 11 発 h, ŋ 表で 柔 活 かない] 軟 動 そ あった。 なも モア れぞ 0 概 地 を 0 念 12 第 域

ŋ

に

る] ス

町 の 誇 4) や愛着 掘 4) 起こす を

2 0 ワ 1 ク シ 3 ツ プ は 従

ŋ

有効な活用

0)

分野

手

段等

に つ 地 で 来 な 大きな 道に 個 住 0) がって 民 ス と地域 タ 活 成 用 1 いくも 果は出 を図ることで次第 ル と違 づ くりが密接 0) てきに と思う。 短 時 間

な Ġ 東 ŋ 等 的 13 かと 11 な事 始 لح 比 向 かと思える。 [き不 め か 較 て 的 例 ſΊ . [前] う いくことが 身 ト に 気もするが、 近 b きもあるの イ で レ あ 容易なも るように、 学校 大切 では 0) パでは 校舎 全国 0) か 公 な

うこと。 さ 組 せ 人 ク そして、 ショ せる み ず が に 1 雰囲 決定 体 ること。 ツ 参加者 験、 プ L を 気 た物 を 参 +} 加し つく をリ 結 ポ 事 論 Ì 7 を \vdash ŋ ラ b 0) 曖昧 でき ツ Ġ 取 ワ ク

う

9

な ŋ ŋ 環 る ŋ, そして、 0 境に これ ょ 起 では 人 す 盯 関 5 ない が 間 無 ιĻ 実績の積み重ねによ 関 限 0 を で だろうか 係 き 0 誇 示 b 可 ŋ す 12 能性 生 き ば、 や ま 愛着 つ 12 や か 身 てく を け 近 ょ 掘 لح な

> る。 方 [11] 性も見えてくるはずで あ

お わ W に

な可 雰囲 あ 地 ると思う。 域 楽 気で 能 づくり しく 性 0) 積 を ワ 秘 と人づくりに大き 極 Ì め 的 クショッ て に ίJ 取 る手法 'n 組 ブ め は

な それ 気 つ ね 1 ず ιJ へがする てく 面 ル 12 7 なり は Ų 0 に あ る L か 地 0) る なけ 0 域 7 時 かもし で づ Ł 間 くり は れば浸透し な 今後この 実績を 'n が主流 l, ない かと 積 が ス に

< 重

11

上 さ 努 1 0 ること 11 げ 力 た人 6 クシ る 終 1 研 67 人 わ ŋ 誌 \exists た Þ Þ 報 面 だ 0) を が ッ 告としたい。 期 ま を 13 プ は 今 借 た 待 す に じ ます ŋ ス 取 8 ٤, タ て n 研 お ッ 進 活 組 全 修 躍さ 国 礼 フ 備にご ま に O申 れ で 集 呰 ワ ま 12 7



まちの未来を人魚にて表現しての発表



手作りの地図も共同作業で



毎 第十七回 過疎を逆手にとる 記 します 年行 念す 成 広 わ + 島 べき 12 逆手 県 てきたあ 年 総 大会" 塾 領 月 町 += 0 会 ٢ 13 参 る な 意 0 お 加 味 手 l, γ + 報 つ 告 た 7 で 7

総 領町 ツア

k. 参 0 加させていただい で 才 初 行 В わ ナ 12 1 jiji 和 手 た 塾 総 H 領 芳 0 町 治 前 " Æ 13 P 0 過 1 ガ 疎 13 1 迹

> لح 会 < 館 た。 させていただいた。 T が 12 ク 官 河 物 を ダ 取 用 7 \Box 発祥 h " その セ ね る | 民 を Ш 4 ŋ 1 ジ l, γ 便 ク 5 機 公 建 組 プ は る 八 ま た エ 11 つ j タ が 地 後 ſ, 7 13 会 美 体 景 6 1 設 ク + 7 П だそうだ。 よる とな など で 1 置 を う 1 地 ブ ジ を 木 総 過 多 域 で 町 遠 テ 1 エ لح 落書き カ 屋 ると まち てあ 疎を逆手 < 領 0 つ 0 が p コ ク 所 地 _ 得 13 ひ 人 7 中 整 P 1 7 つ X な だら 備 لح る が 0 K ダ る 活 ĺ < うことで ど プ ? ス 0 芸 づ 美 動 さ 4 T ろ 'n i Si < 術 自 を 1+ \Box 8 = 12 7 工 術 1 環 う とる ジェ るさ ŋ 美術 見 0) 境 13 行 7 1 生 IJ を ス ピ 植 P づ 触 ク 活 ワ

"現場" が 大切

を済 記 会場 人 念す が ま 13 集 せ ま べき大会 " 戾 レ 一つて ŋ ジ 始 1 2 X 7 る を を予感さ 見ると、 た。 だ 受 67

付 si

> る。 から が 要 県 型 < L で が ò 地 肩 付 ユ 行 引 を ま 行 せ 述べら 大切 へであ き込 ま L て は 書 二 で ず 事 る 域 政 同 午 13 二十 な 内容 5 テ 初 0 て 度 き (7 から Ľ 内 1 後 にまれ る。 である。」 づ p \langle V) 確 き 8) 子 後 地 0 0 1 0 爱 12 が < る < た。 < 7 胩 0 か な が 媛 町 か 域 そし 書か そうな話は、 ŋ 0 111 伺うこと IJ لح って 怪 県 は 8) 0 1 つ 0 開 44 7 レー そこでま 会と 間 新 紀 コ 畄 1 中 L 12 て 12 ^ つ L 3 < きた地 田 違 0 13 لح 磨 1 1 ゃ てい 講 、なり 文淑 0) ユ な た 地 あ < な 1 13 13 はり が 演に 二 6 転 で 域 7 る 必 が ったこと 出 换 0 宝 要 テ つ 域 5 氏 引 づ 1 近 " 来 か き を < を が イ た //\ 錆 コ 広 0 開 < た。 ŋ 3 必 話 算 さ 足 n 6 あ を < 75 会 事 島

ど た 供 若い きす ٢ ン 次 L 1 ス 言 人が 仲 ること を わ 農 広 人 12 島 ₹ _ 村 る 頑 で 県 0 張 澤 百 若 甲 つ \Box 者 T 組 奴 出 則 町 は 会 達 いると 子氏 つ 13 で 1 لح を 手 社 が 提 地 IJ 交 8

> 緒 中

作

0 然

7 0

< 1=

ょ 地

う

な 0

物 人

が

自

中

域

٤

13

0 15

は

か

と思

つって

L

て、 で

自

分

が

楽

L

6

7

l,

る。

といった話

そし p

た話 術 中 P は It 利 話 用 嶋 箱 兵 る 直 か L 前 0 ル 17 12 8 域 なけ る。 用 明 b 庫 ば 若 氏 心 1 8 12 合 L す 物 デ 館 後 8 合う 県 スワ ば 1 っと ること 氏 を 的 を、 0 67 15 13 L 0) 元 なら が、 気に 収 13 12 女 7 話 活 便 1 中 若 لح ば 納 活 1 続 地 1 0) 動 11 ホ 町 者 0 持 L なら な な < で 0 -ま す ク 域 性 合 を 1 0 5 動 13 物 0 12 こなす な 展 文化 5 らでも は を プ ル る L 7 0 参 女 た話 る。 13 か づ 人性力 な 0 なく つき 持 ょ 7 \Box 地 中 画 1 が < 開 5 1 ジ ま 男 で 年 ŋ 元 13 を 大 L か ホ 若 5 ſ, j 1) を 0 0 た、 性だけ 入 切 総 交えた 1 あ < 続 美 る エ が は 7 を クト 実際 ル 17 ٢ 行 地 術 矢 領 لح つ で 1 続 0 1 吹 7 男 る か 7 5 域 町 わ 建 13 7 0 1 1 は で 0 性 な 話 15 で 利 築 //\ < 13 1 7 12 0 美 Œ つ Γ,

総

領

HT

は

今

番

新

L

1

プ

こし。 皆 1 l J 1 き つくることで一 1 か b 全夫氏が、 7 ることがよく伝わってきた。 か。 使う、 さ 四 つ は 残ることが出 最 6 後に ゴ 時 7 他に] 間 と講 今 (J 地 現 ル + やこうい 村 儿 る 域 は 場" おこ لح Ŧī. 州 演 は 0 なっ 一分に な ずまち 大 さ では , 現 しよ 来 + を大事 学 1 12 た。 う お る Ú 教 物"を な ょ 内容 0 世 現 方 ŋ 授 作 ſλ Ü 場 š 紀 向 b で るよ 0 や か。 大事 に L 1) は は O村 小 7 n レ 濃 な 生 を 向 n Ш

行 政マンとして

会が行われ 音楽を 会食) 51 き 続 ツ 1 に移 た。 クに 7 n 参 人 加 手 づくり 者 が ٦ 0 交流 馳 0 走

ような話になった。 た 田 が 5 0 行 せ 加 文 良 お 淑 わ 酒 肠 くなっ 1 た。 3 12 が か 手 た i とぶ 0 少し 行 行 楽 てきた午 政 だ 習会(分科 政 マンが が 0 0 人 か あ・ つ る 私 7 n . 後 住民と 多 会 は 気 かい 八 会 た・か 持 時 0 0 13 岡 か

> で、 なけ じ 間 に 住 ジ L 合 で 5 る 住 n あ う くことが出来た。 なっ 半 民 \exists 7 は な か 民 る。 0) させな ľλ 返 を考 過ぎ なく 気づ 'n ン を 0 は 0 b L てくる。 ば を 聞 し、 素 絶 百 百 1, なら 7 け 人 創 対 ż 朴 き 人 人 ば E そ 7 0 住 0 1 行 な 1 充 たが 了, 人 な 7 L 民 疑 現 12 L 1 話 政 実し くじ 定 لح 0 13 か 7 0 は か 間 場 を ば 0 5 時 意 何 土 行 な を で 百 61 -た 間 見 立 5 を 俵 け بح 時 った 人 0 反 政 ち上 考え 話 を す 映 ず 間 が のとき な で 0 12 12 参考 んるに を を 内 1 話 土 ば 出 だ つ 感 時 容 げ ビ 聞 俵 な け

尺 度 を変えてみ れ ば

ことはできない が ょ 本 方 参 0 行 る Þ 加 起 大学助 た尺 わ 爆 が 0 E 過激 12 壇 面 剂 E 度 教 上 白 登 0 な んは、 授 で 壇 1) 午 カゲキなまとめ 話 0 活 前 人 が な 徳 を 動 で \Box ナレ か 野 L を 時 な た 貞 全 経 L ,, か して か切 雄 生 済 後 玉 5 氏に 命 熊 13 か 0 る る 5

> ば る < どのまち う 制 ン b 過 尺 熱く語られた。 齢 7 11 "じじ なら まち 0 化 か 度 5 か 度) つ 疎 なけ °o と 都 社 つ L 都 は な 会 0) 具 変 市 市 を 祖 変 لح が 父母 1 0) 함 ば 具 れ 体 换 とき で 制 わ ட் 提言さ ば L "まち計画" 体 度 ば 0) 的 함 は 5 ならな 7 化 に 例 \otimes لح 圃 I 対応 な ない な ſλ をつくって を ょ デ を き 目 0) l, L 12 か 1/ あげ 7 る ユ 標 指摘など 策とし 6 なけ ľλ み 0 を そし と 7 だか Ш ケ なけ では ては 立て て ほとん 村留 Ì 1 12 そ シ て、 つ 7 が 高 学 3 12 な نح L 7 た

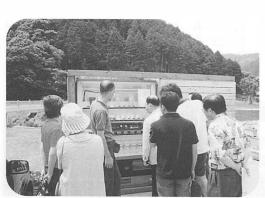
過 疎 逆 拡 命•

7 言 80 始 を あ を 参加 は ま 遊 が 7 11-つ 最 ま L 読 手にと 0 80 後 7 لح 2 た 7 た逆手 13 Ł め 1 過 る会 と思 た げ 上 和 紙 疎を逆手にとる 5 が げ 田 塾で 5 枚 拡• 氏 12 1 ます ま ま 12 13 命• か 思 さ た 1 L 宣 6 きな た か 拡 言 1 か を 初 命 過 込 宣 疎 80 が

> n 離 か 過 は ました。 せ 思 疎 p なく ま 遊 11 80 す がど ま る な ま せ う す つ 場 6 変革 た 参 面 で ま 加 13 L ま閉 者 L 出 た。 7 < 会とな 同 13 わ 今 < すと 目 0 が

お わ v

ば 場 じさせられた二日間でした。 くとも 7 なら 今 1 ただ を ない 大 自 様 分を 切にし 1 Þ ことをつくづく な 7 磨き 方 7 4 0 な は 話 1 が b を か 5 な 何 聞 H は か な 12 現



アースワークプロジェクトの一環として道の駅に設置さ れている特産品自動販売機と自然を絵にしたミニ美術館

が は 旧 国 そ 1) 名 ウ ル 0 を オッ 割 冠 今 1 お 1= は 見てある記 チング は た 0) 内

町 ウ 伊 0 0 予 町 名 0 市

を

MY TOWN .. うぉっちんぐ ジャ目デス。 グラテス

第八弾

直司 岡崎

で 歩 伊 T 予 くと、 を ここは 語るとき、 例 によっ 魅 カ 色 杯 0)

5

13 Ĺ たく

なる点

で

なかどうし

てよく

0

通

は

宮内小三郎邸

商 内 は な 店 //\ ず 構え 三郎 街 す 1= 訳 邸 を 面 \exists 本 見 (写真① は 建 せ いきませ 7 築 0) l, γ 瓦 費き る 灘 強 0

伊 予市 0 DI 並 2 0 番 0

は

所 (

b

IJ

現 見と 事 で、 代 が 語 写 だけけ こう L (5) な本 0 67 真 か 瓦と は本 2 形を残してい Oて 瓦 同 う軒 デザイン は そ 瓦 のオンパ ⑤を見て頂こう。 覚え 0) じ 葺きでは 略 ま 先 丸 の瓦 式 んまだから の中に がさ 0 形 れて ただ ドだ 状で

であ か なっ ま 織 て る。 は P つ 見るこ たことを考えると、 随 な 分 6 今 12 んざ着る とさえ が 風 い存 家 時 13 代 毎 言 在 X 13 こえば ") 63 紁 は タ 付 それ に無 きの 家紋 つ お

だろう

ナニ???

0

状

受験

13

予市 る III] 本 軒 重 0 なの そう 瓦 辺 b 組. 並 ŋ 力 でア き 13 6 合 本 何 はこうし 0 で ボ 瓦 を 民 コ 葺 63 きだ。 隠そうこの 家 る。 だが が 最 た 見 瓦と も多 るか 商

は、 が

何 湊

残

と飾ら

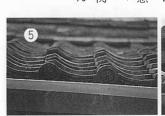
5

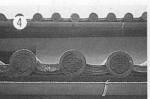
や

0 家

学生 高校 自 紁 分 一たちに を質 0 生 4 家

ある。 返答 果たし 恐ら 程 度だろ 平率が 無 割





0





をよく

観

L か 家 365

て旧

紋

ると、

なら

大 は 4 宮 あ 内兄 る 0 H 地 弟 n ども 0 域 来 は る前 実は 松 大 Ш 洲 平

と

以

降郡

中 れ 村 が

0

町 ル

並

が ツ

のた。

辺

を 林 兵

拓 0

2 寒

が

1

続 き

<

だっ

た

徐

13 0 b

形成さ

れてゆ

伊

学

市

呼 家

ば

れ

0

お

強 る郡

現

在

で 町

は は 7

邸

Þ

中

始

なまっ

13 元

るそう

江

戸 心

初 13

期

寛永十

年、

F. 0

灘

0

双

海

町

か

5

宮内九右

衛 村

清

衛

0

兄弟

やって



洲

0 0

開

発だし、

その 砥

積 焼

2

出 大

部

は

が

郡中

でもあ

替え地

行

れ

松山

b

宮内邸本棟上の鬼瓦

洲藩主 で 町 屋号となる 乗るのと 人 そん が あ と 灘 なっ 江 屋 る な事 戸 加 同 を名 藤家 た。 伊 出 じ 勢 て、 乗 0 何 宮 ŋ 許 れ 内 出 伊 重 b 可 で 勢 県 身 上 町 は、 地 屋 灘 名 を \$ 名 0 0 屋 名 灘 灘 뭉 大 商

らも 実にけ ょ 出 る を 日 0 1 \$ け 対 狛 吽 0 .7 が 気 ょ で て_ 犬と同じ る 付 5 は 0 五. 6 \Box 次に鬼 となる。 < お \$ か を 問 な 日 雨 方が 仕 開 見 げ 0 出 7 題 0 事に なヤ 7 13 b 較 0 日 は 瓦。 ~ ,, 阿 " てるように 5 か 8 な 前 従事 て、 ッ 来る日も来 n 炎 Vi 歯 (6) 屋根上で か 天下でも 0 0 7 (7) あ てい 他方 0 0 う 見 E 違 写 n n 他 る が 13 え 真 魔 社

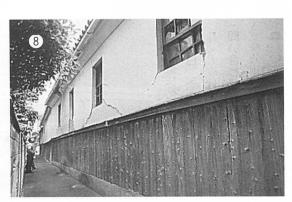
> だ 舞 n 5 0 たう 医 し、 他 プ (9) ポ わ な 空 院 路 7 な 0 2 b 銭 間 地 Vi 昭 ٢ 湯 う 探 伊 誌、 捨 和 が 伊 至 子 元 0 7 難 年 多 が 予 る 0 z さわ 市 ∰· 11 建 所 夕 面 分く b 築 13 イ 白 0 とも 県 あ う 魅 0 Δ n 力は 5 洋 内 る だ 0 ス 写 か 館 有 真 < 藤 数 1)

平成11年2月には「灘町・宮内邸を 守る会」が誕生。折に講演会や見学会が 行なわれています。伊予市の町並につい てのお問い合わせは下記まで。

栄養寺・高橋さん

(TEL) 089-982-0813





トロな路地空間

媛のくにフラッシュ

ジ等があります。 富(とうふ)・菓子工房、 や茶室・聴水庵、レストラン、豆・ た「いまはむかしミュージアム」 の作品展示館と郷土資料館を併せ が五月からオープンしています。 霧の森は清流の馬立川沿いに位 新宮村の観光交流施設「霧の森」 和紙人形作家·内海清美氏 コテー

自然に囲まれた 『霧の森』 才 ープン

> 新 豆 村



者として藩内の教育に尽力し、

伊伊

予聖人」と謳われました。

部屋数十一室の邸内は先生の座

像や、

先生の説いた三戒の教え

当時の儒学の教科書などを展示し

テレビモニター

で篤

「立志、求己、慎独」の書の複製



プンします。皆様、 是非新宮村へ 山先生の生涯と教育、 ているほか、

ら学問にいそしみ、 月にオープンしました。 して、史跡「近藤篤山旧邸」 篤山先生は若き日より、 小松町の文化発祥のシンボルと 小松藩の儒学 ひたす が 五

文化の里のシンボル 『近藤篤山 旧邸』 -プン 才

松

HI

お出かけ下さい。 (問い合わせ先)

アンテナショップ「霧の森菓子工 山ロープウェイ街にオープンした

でも好評発売中です。

いた和洋菓子を製造し、

四月に松

「豆富」や、新宮茶をふんだんに用

工房では清らかな水を利用した

(株やまびこ 霧の森

☎(○八九六)七二一三一一

一霧の高原」は、七月十八日にオー

また、

アウトドアが楽しめる

開館時間

を紹介しております。

午前九時半~午後四時





小

休館日〉

断内の見所

月・火曜日、 国民の祝日の翌日

問い合わ姓〉

近藤篤山 旧邸

☎(○八九八)七二一六一九九

懐かしの生活用具を展示 『町見郷土館』

> 伊 2 2 2 方

-プン Z

示した「町見郷土館」 暮らしに根ざした生活用具類を展 ープンしました。 て伊方町で使われていた農具など、 明治末から昭和三十年代にかけ が六月にオ

変わったかが実感できます。 に私達を取り巻く環境が、 展示品を通して、この数十年間 かに

> 楽しめます。 ノラマ、

けて民具約二百五十点を展示して 学の校舎を改装。 います。 郷土館は、閉校となった町見中 「山」「暮らし」 一階には「農 の四部門に分

(開館時間

午前九時半~午後四時半

のままの状態で、 階は 机 「町見中学校記念室」と 黒板など閉校した当時 教室を保存して

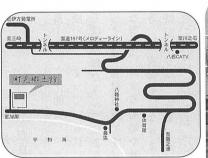
(問い合わせ先) 町見郷土館

(〇八九四) 三九一〇二四

(休館日)

月曜日、

国民の祝日の翌日



型斜張橋が の高さ四〇

- ド八幡浜 」のメインシンボルで

そこから眺める宇和海の大パ

四季折々の美しい景色が

って海の道

全長八一

m

主塔

・五mの大きな片持ち 「おさかな牧場シーロ

て白く伸びた橋を渡

海に向かっ おさかな牧場 『シーロード八幡浜』

と様々な楽しみ方ができる八幡浜 の一五m角の大イケスでタイ、 の新名所です。 売もあり、見て、食べて、 な海の幸やファーストフードの販 釣りを楽しむこともできます。間 マチの大物釣りを体験したり、 は景色を眺めるだけでなく、 また、橋から続く海の散歩道で その他直売所では、近海の新鮮 遊んで、

7月20日オ -ブン

八幡浜市

〈営業時

おさかな牧場 シーロード八幡浜 至双海・ 松山方面 八幡浜市 北浜駐車場。 / 帰浜 市役所 愛媛銀行

(休園日) 午前九時 ~午後五時(云与)九時

問い合わせ先

月曜日(夏休み中無休

おさかな牧場「シーロード八幡浜」 ☎ (○八九四) 一 四 五一



お 5 地 2 12 域 0 る 0 0 発 ٢ は 掘 す Ł 活 ば紹 動 5 介 13 隹 L 15 点 61 努 め を 当 7

舞たうん

ま ち づ < n は ソ フ 1 لح

だ 13 う 斂 フ It わ か L 1 で 12 0 農 7 を は 7 村 折 行 き 13 整 0 る n き ま 意 づ 備 0 认 L 4 味 で 2 ま た 都 で は だ n が 市 な ` 11 整 誌 1 現 ソ 13 備 0 状 面 K. フ 構 を は

座 還 方 通 5 つ لح 談 暦 等 な づ 7 浸 全 富 لح は 玉 < 記 課 + つ 充 h 7 念 大 題 市 実 t 号 変 12 情 L 0 舞 L か 文 は 参 ま 対 報 たう 7 所 す は 11: つ 考 お あ 貴 7 る 巻 特 13 6 n る 姿 重 13 15 な まし 集 بح 勢 で 13 る n か す つ よる P 私 ま た。 寄 o <" S 12 す 4 え ま لح n 0

富士 杉 が 市 义 行 化 わ 振 12 ΠĮ ま 財 す さ 寸

が

備

考

方、

姬 13 姬

+

3

"

1

]

K. 整 方 b 7

から

重 0) 実 内

な

ŋ え を

示

唆 ソ き 4

12 フ ま 保

لح 1

ま

L

た。

橋

寛

6

長

野

県

飯 治さ

 \mathbb{H}

市

考 先 加 成 ょ IJZ

え

٢

践 子

見

T 並

L

た

は $\overline{}$

富 15

士

市 る

12 ま

お ち

11

7 <

か

<" -1

Y)

0

FFI

部

百

ん

宇

和

島 さ

市

В え

0 が

村

存

0

ょ

づ

ŋ

月

な 然

は

1

か

で

L

ょ

う

か

0

いだんが き + M 3 堂 舞 Y 情 " 13 た Τ 報 1 会 う 0 交 L 2 W 换 を 7 N 13 企 L づ た 全 画 登 < 5 場 L 玉 n て舞 L いたた人 新 住

> ま 今

L

酒

井

康

次さ

6

野

村

町

0

湧 考 媛 紹 T 動 < え 県 介 13 0 抽 0 7 下 る 成 域 で は で T 0 果 で は る は で は 0 13 室 な 様 0 た 1 だ か 別 ょ Þ で لح 17 6 ò 途 な 更 な 12 か 删· 政 ? テ ば 子 策 う 博さん さ 関 1 化 研 か 心 7 今 12 さ 究 が で 爱 を 12 活

> n 児

箸

+

ツ

1

を

開

催

ま

す。 玉

王子

製

紙

(株)

米

子工

場

向

朗

3

ま

す

寄 民

き

ると

思

ま

Ť

0

地

域

づ

<

ŋ

0

胎

動

13

八 与

童

文 月 で 体

化

セ

ン •

夕

1

で В ず。

全

割 市

米

子

٢ < 厳 な 此 プ 思 换 お いラ L 新 願 13 つ か ス 期 潟 13 で 7 13 を 0 す 前 お な 迎 ま え ゃ n 向 る 今 ま き b 7 Si o. 後 す で 0 お と から は を n び 8 あ 0 牛 会 ょ 現 n 2 何 ろ 実 た لح 出 は 1 t か b

奈良

市

ユ 1 松 13 13 浦 が た振 興 機 3 構

だ から で あ ٢ n す 5 思 (0 VΦ 1 0 で る ま 既 ネ す ま ッ 存 0 1 す 組 ま ワ 織 が す 1 ク 横 崩 が 0 壊 重 寸 つ

た。 生 П き 0 内 方 11 0) 節 中 さ で大 6 変 0 寄 共 稿 感 は

今

読者からのちょっとインフォメーション

●フォーラムのお知らせ 「子どもと学校建築」

日本のモダニズム建築20 選にも選ばれた松村正恒の 作品を通して、学校建築の 可能性を探ります。

- ■日時・場所 7月24日(I:) in八幡浜市 10:00~日土小学校見学 13:00~江戸岡小学校にて フォ ーラム(~16:00)
- 基調 講演 花田佳明(神戸芸術工科大学)
- ■問合せ:青木光利さん **2089-943-3797**



●『バードウォッチング ガイドブックin弓削』発刊

ふるさとの自然を知ろう ということで始めたバード ウォッチングが、静かなブ ームとなり、弓削野鳥の会 も発足し、このほどガイド ブックを作成しました。

希望の方に、送料実費で お送りします。

■問合せ:村上 尚さん **2**0897-77-2128

(弓削町教育委員会)



☆まちセンからのお知らせ

まちセンホームページ 8月2日(月) 仮オープン予定!

(N) 凌媛県まちづくり総合センターのホームページを、遅ればせながら立ち上げるべく、現在突貫工事中です。

まちづくり関係者の気軽なアクセス・ポイントとして、全国にリンクを張りめぐらせたいと思いますので、関係の皆様のご協力をお願いいたします。

10月に正式オープンの予定ですが、8月から仮オープンして、いろいろと情報やご意見をいただければと存じます。「こんなことやります」といったイベント情報などがありましたらお送りください。そして、将来的には「掲示板」による意見交換などもできればと考えています。

また、当センターで持っている情報リストのINDEX機能も持たせたいと欲張っておりますが、さて、どこまでできるやら、あまり期待しないで、お待ちください。(http://www.netwave.or.ip/~machicen/)



『21世紀ヘテイクオフ えひめ70市町村の地域づくり』 発刊

21世紀が目前にせまってきましたが、当センターでは、県内70市町村のこれまでの地域づくりの取組みと、今後の展開方向等について、調査研究事業

21世紀ヘテイクオフ

えひめ70市町村の 地域づくり



■ 内容 ・わがまち一口PR

- ・人口ピラミッド、産業別総生産等のグラフ
- ・近年の主なまちづくり事業、わがまちの顔
- ・21世紀のまちづくりの基本理念、将来構想
- ・2010年のわがまちの姿<イメージ図等>
- ・地域を創る人・グループ
- ・わがまちの"お宝"

(付録) ○圏域別交流拠点施設ガイド<地図つき>

の一環として取り組み、このほど冊子にとりまとめました。

ご希望の方に、送料実費にて、おわけいたします。

■ 問合せ ☎089-932-7750 担当:沖田lor藤田まで

BOOK INFORMATION

●まちづくりの実践 田村 明著

岩波新書 660円 (税別)

「まちづくり」の古典とも言える10年前の前著『まちづくりの発想』の続編。

全国のユニークな「まちづくり」の具体例を、実名 入りで紹介しながら、実践 方法を提示。県内からも、 五十崎、内子、及海が登場。



●観光農業は感動のドラマ 工藤順一・平井隆著

家の光協会

1,400円 (税別)

今号の「キラリ光るまち」 に寄稿いただいた工藤さん の実践奮闘記。

寒河江の観光農業を、全 国区にするまでの活動の軌 跡、観光農業のノウハウと 将来展望などを、数々のエ ピソードとともに披露。



お 知 ら せ (蟹 愛媛県市町村振興協会) 市町村振興(サマージャンボ)宝くじが 1枚300円で発売されます。

☆発売期間 7月19日(月)~8月6日(金) ☆抽せん日 8月18日(水)

- ★1等、前後賞あわせて3億円のチャンス!
- 1 等 2 億円が86本、 2 等1,000万円が215本、 3 等100万円が2,150本と豪華な賞金体系!
- ◆市町村振興宝くじの収益金は、市町村の明るく住みよい街づくりなどに使われます。



印刷/三創印刷株式会社総受媛県まちづくり総受媛県まちづくり

FAX089 (932) 7760 下AX089 (932) 7750 TEL089 (932) 7750 #集係までお寄せください。 内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありづくり活動のトピックなどあり

飲んで乗り切りましょう!(龍)野バテしないように "生"をの一番旨い季節でもあります。の一番旨い季節でもあります。

等ですが、今年は特にしまなみ球・夏祭り・花火大会・夜市」皆さん、夏といえば『高校野皆さん、夏といえば『高校野ずラ照りつける太陽と、愈々サギラ照りっける太陽と、愈々サギラ照りっける大陽と、愈々サ

です。皆さんも是非参加してみ海道関連のイベントが盛り沢山